気が付いたら、攻略されそうです・・・

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気が付いたら、攻略されそうです・・・

【Ｎコード】
Ｎ８７２０Ｙ

【作者名】
零堵

【あらすじ】
目が覚めると、俺は女の子になっていた
しかも、なんか見た事あるな・・・と、思っていたら
ゲームのキャラになっていて、しかも主人公とのトゥルーエンド百パーセント状態で、このままいくと一週間後にトゥルーエンドになるので、俺はこう決める
「この状況で、バットエンドを目指してやるぜ」と
そんな、性転換した彼女の物語
十二月二十二日、ユニークアクセス数一万人突破！

ありがとうございます。十二月二十七日、完結しました。

～プロローグ～挿絵付き～（前書き）

十二月十四日
キャライラスト更新です。

～プロローグ～挿絵付き～

＞i371116―2971＜

気がついて、目が覚めると、そこは自分の住んでいた部屋とは全く違った場所だった。

「え・・・って、声が！？」

目を開けて、部屋の中を見てみる。
俺のいた部屋とは随分違い、部屋にぬいぐるみが飾っていたり、鏡面台と勉強机があったり、まるで女の子の住む部屋だと思った。
それにさっき出した声も高かったし、もしかして・・・と思い、胸とか触ってみる
自分で触ってみて気がついた事、大きくはないけど、確かにそこに胸が膨らんでいて、あわてて股間も確認、そこには、いつも見慣れた物はなかった
これで、俺は確信した

俺は、女の子になってしまったと言う事に
けど、なぜそうなったのかが意味不明だった、覚えてる限りでは
家でゲームをしていて、急に眠気が襲ってきて、気が付いたら、こ
うなっていたからである
ネットとかで、転生とか性転換とかを使用している小説とか見て面
白いな～？まああありえね～けどな？とか、思ってはいたが、まさか
自分がなるとは思わなかった
着ている服装も、いつも俺が着ている服装ではなく、ピンクのパジ
ャマだったし、よく見てみると、ブラまでしているので、確実に女
だな・・・と、意識してしまったのである
で、女になったのは、まあおいといて、俺は一体誰になったんだ？
と思い、鏡面台があるので、さっそく使っていたベットから降りて、
鏡面台で、自分の姿を見て見る事にした
そこに映っていたのはと言うと
「え・・・水無月あかね・・・？」
そこに映っていたのは、栗色の髪のショートカットのかわいい感じ
の顔で、その顔には覚えがあった
何故なら・・・その水無月あかねと言うのは
俺のプレイした事があるゲーム「ラブチュチュ」に出てくるヒロイ
ンだったからである
という事は・・・俺、ゲームのキャラになったのか！？っと、心底
驚いてしまった
やった事のあるゲームだから、状況を確認する事にした
まず、部屋に飾ってあるカレンダーと、時計で日にちを確認してみる
「っげ・・・七月一日だと・・・？」
カレンダーは、七月となっていて、日にちが一日だった
ゲームでの話で言うと、この「ラブチュチュ」は、６月の初めから
スタートして、七月八日で終わりを迎えるのである
８日を過ぎると、トゥルーエンドか、バットエンドに進み、それで
ゲームが終わる

最後にはその後どうなったのか、ワンシーンが流れるので、ゲームではよくある設定でもある
水無月あかねを攻略対象にして、やった事のある俺から言わせると、水無月あかねは、六月の最後の日で、ストーリーが劇的に変化するのである
つまり六月の時点で、選択肢を間違えると、バットエンド確定だったから
日にちが七月という事は、百パーセント、トゥルーエンド確定状態なのであった
選択肢も、どれを選んでも、トゥルーエンドだったので、それはよく覚えていた
という事は・・・
「俺・・・トゥルーエンド確定ルートだから、主人公と恋愛する羽目になるのか!?」
俺は、想像してみる、主人公との恋愛をする事を
はっきり言うと、嫌だった、男だったので、今さら男を好きになれないし
こんな姿になっても、女の子大好き!なのである
だから、俺は、こう決めた
「決めた、絶対にバットエンドになってやる・・・」
そう決めて、行動にうつす事にしたのであった

～プロローグ～挿絵付き～（後書き）

いきおいとノリで、書いてみました。
うん、これも書こうと思ったら、書こうと思います～

～第一話～一日目～朝～（前書き）

はい、零堵です
今日は、二回目の投稿です～

～第一話～一日目～朝～

俺は、とりあえず水無月あかねとなってしまったので、これからの行動を考えてみる
確か、ゲーム「ラブチュチュ」では、色んなイベントがこれからある筈なので、それを出来るだけ、回避する方向で、動こうと思う。
まず、時計で時刻を確認してみる。時刻は、朝の七時となっていた
確か、水無月あかねは、高校に通っている一年生だったので、カレンダーを見てみると、今日は月曜日
と言う事は・・・平日なので、学校に行かなくちゃいけないかと思うなので、俺は、着ているピンクのパジャマを脱いだ
パジャマを脱いで、現れたのは、白色のブラジャーだった
うん、改めて思うと、女の子になったんだな・・・とつくづく実感してしまった
触りごごちはどうなのかな～と、思い、胸を触ってみる
「・・・・・ん・・・・」
感触は、結構柔らかく、なんかフニフニしていた
おまけにちょっと、体が熱くなった気がして、即触るのをやめた
もしかして・・・俺、ちょっと感じてしまったんだろ～か・・・と、思ってしまったのである
気を取り直して、下も脱ぐ
下も上とお揃いなのか、白色のパンティーを履いていた
「・・・・男のままだったら、興奮するんだろ～けど・・・今じゃなあ・・・」
元の姿だったら、興奮するのかも知れないが、自分の体になってしまったので、ちょっと、残念な気分になった
気を取り直して、俺は、ハンガーにかかっている、高校の制服と、折りたたんであるスカートを持って、着る事にした
うん、制服とスカートは、ゲームと一緒なんだな・・・、と思った

のである
ちなみに色は、クリーム色で、リボンが青色で、スカートの色が緑色の、ちょっと変わった感じの制服だった
女物の制服なんか着た事がなかったので、苦戦しながら、何とか着る事に成功し、鏡面台で、自分の姿を見てみる
鏡に映っていたのは、制服を着た、水無月あかねの姿が、映し出されていた
改めて見てみると、思いっきり美少女だよな・・・と、思う
主人公が、惚れるのもなんかわかる気がするな・・・と、思ったが
俺は、主人公と恋愛する気は全くないので、主人公に惚れられないように、頑張る事に決めたのである
そう思っていると、外の部屋から
「あかね～？起きてる～？朝食出来たわよ～」
そう聞こえてきた
確か・・・ゲームだと、俺に話しかけてくる人物は、水無月あかねの母親、水無月文香だと、思われる
俺は、返事しないのもなんなので
「うん、起きてるよ、今からいくね～」
そう、答えて、自分の部屋を出るのであった
部屋から出て、すぐにリビングが見つかり、その部屋に行くと
そこにいたのは、朝食を用意して、エプロンを付けた、ゲームと同じ姿の、水無月文香さんがいた
「あ、あかね？起きたのね？いつもは、遅刻ぎりぎりだったじゃない？」
「そ、そうだっけ？」
「そうよ～？いっつも私がおこしに行ってあげてたんだから、一体どういう心境なのかな？」
「私だって、たまには早起きするよ」
「そう？それは、助かるわね？あ、朝食出来てるから、食べて学校行きなさいね？」

「あ、は～い」
そう言って、俺は、用意された朝食を食べる事にした。
うん、かなりおいしい、文香さんは、料理上手なのか・・・と、感心してしまったのである。
あっという間に食べ終わって
「あ、そろそろ出かけなさい？あかね？」
「あ、うん、行ってきます」
そう言って、家を出て、通っている高校とやらに行く事にするのであった
高校の場所は、名前を覚えているので、問題はなかった
さて、高校に行って、何から始めようか・・・と、考えながら、通学路を歩く事にしたのであった・・・

～第一話～一日目～朝～（後書き）

アクセス数見てみたら、一日に２００人以上ですと！？
ありがとうございます
感想くれると、作者のやる気があがります～

～第二話～一日目～学校潜入～（前書き）

はい、零堵です。
投稿します～

～第二話～一日目～学校潜入～

まず、外に出て気がついた事は、街中もゲームに登場する街並みだった
まあ、人がちゃんと動いているので、これが現実なんだと、実感してきた
俺は、通学路を歩いて、通っている高校と思われる、建物に辿りつく
ゲーム「ラブチュチュ」では、私立白稜高校となっていたが、校門を見てみると、「私立白稜高校」と、表記されていた
うん、ゲームで見た学校と、同じ形をしていて、後者の高さも同じだった
もうここまで来たら、驚く事はしないでおくか・・・と思い、校舎の中に入る
水無月あかねは、確か1年4組のクラスだったので、1年4組の教室を、探してみる
すると、二階の奥に、1年4組を見つけたので、その中に入ると
クラスメイトがもう、ほとんど座っていた
俺の席は、どこかな・・・と探して、机にかかっている持ち物の名前に「水無月あかね」と、書かれてあるのを見つけて、その席に座る
うん、スカートなんか初めて着たからか、なんかスースーした
席に座って、これからどうしようかと、考えていると
「おっはよ～あかね？」
「・・・？」
ゲームの中では、見た事のないキャラが、話しかけてきた
姿は、黒髪のショートで、かなり胸が大きい、Dぐらいは確実にあると、思われる
一体・・・誰なんだろ～な・・・と、思っていると
「どうしたの？あかね？私の事見て、何か考えてるけどさ？」
「えっと・・・誰？」

「ちょっと、それ本気で言ってるの？」
「う、うん、ちょっと階段から落ちちゃって、人の名前とか、忘れちゃったんだ」
適当な嘘をついてみると
「そうなの？大丈夫？まさか、大親友の私の事を忘れるなんてね？私の名前は、笹村理恵子、理恵子でいいわよ？」
「わ、分かった、ありがと、理恵子」
あかねにこんな親友がいたのか・・・驚いたな・・・
「ところでさ？あかね？」
「な、なに？」
「先輩とは、上手く言ってるの？好きなんでしょ？先輩の事」
先輩って事は・・・もしかして・・・
主人公の事か！？
確か、ゲームでの設定の主人公の名前は「初崎孝之」だった筈
「そ、それって、孝之先輩の事かな？」
「そうよ、で、孝之先輩に誘われたのかな？そこの所、詳しく教えてくれない？」
「さ、誘われてないよ？（まあ、この後誘われるかもしれんけど）」
「ふ～ん・・・なんかあやしいわね～？」
そう理恵子が言うと、キーンコーンと、チャイムが鳴り始めた
「っち、詳しく聞こうと思ったのに～まあいいわ、あかね？また後でね」
そう言って、理恵子は自分の席に戻って行った
これは、とりあえず助かったのか・・・？と、思ってしまったのであった
うん、とりあえず今日のやる事は「主人公の初崎孝之と他のキャラの好感度を調べる」と、決める事にして、授業を受ける事にしたのであった・・・

～第二話～一日目～学校潜入～（後書き）

一日のアクセス数が、３５０人ですと！？
すごいですね・・・こんなの初めてですよ
これからも、この物語をよろしくお願いします。

～第三話～一日目～高村菫～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数すごいですねｗ

～第三話～一日目～高村菫～

まず、やる事は「初崎孝之と他のキャラの好感度を調べる」と決めたので、実行に移す事にした
授業は、なんか簡単だった、まあ先生に当てられもしなかったので、適当に聞いてるふりをして、黒板に書かれている文字をノートに写す作業だけをしていて、授業が終わる。
お昼になり、確か、この学校には学食があったので、そこに行ってみる事にした。
そう言えば・・・この世界でのお金ってどうなってるんだろ～な？
それを確認してみる事にして、自分の鞄の中を調べてみる
中には、ノートや教科書の他に、使用がわからない布状の物も入っていた。
もしかしてこれが、ナフキンとか言う奴なのだろ～か・・・？。
そして、ピンクの財布らしき物を見つけて、中身を見てみる。
中には、笹村理恵子とのツーショット写真や、小銭とお札が入っていた。
よく見てみると、小銭もお札も、見た事のある物だったので、これは使えるんだな・・・と、実感した。
そのピンク色の財布を持って、学食へと向かう。
学食に行くと、生徒が大勢いて、結構混雑していた。
その学食の券売機を見てみると、お金を入れるスペースがなく、ボタン表示が光っているので
生徒もお金を入れる事なく、ボタンを押しているので、これは、全品無料なのか！？と、驚いてしまった。
まあ、何にしよ～かなと、考えて、きつねうどんのボタンを押す
きつねうどんと書かれた券が機械から出てきて、食堂のカウンターに置くと、すぐにお盆に乗せたきつねうどんが出てきた。
お盆をもって、あいている席に座って、きつねうどんを食べる

うん、マジで美味い、とりあえず飯に関しては、この世界と前の世界とは、結構同じらしい。
食べながら、まわりを確認してみると、ゲームでの攻略候補の一人を見つけた。
髪の色が銀髪のストレートで、かなりの美人さんに見える
名前は「高村菫」と言って、確か三年生の上級生である。
ゲームでは、いつも屋上にいて、空ばかりを見ている、結構不思議ちゃんな感じの人だと、高村菫を攻略対象にした時に、思った。
高村菫は、食べ終わったのか、食堂から出て行く。
向かう先は、多分屋上なんだろ～な・・・と思い、俺も食べ終わって、屋上に向かう事にした。
屋上に行くと、暑い日差しの中に、外を見ている高村菫の姿を見つけた。
俺は、高村菫に話しかけてみる。
「あの、高村先輩ですよね・・・・？」
「・・・貴方は？」
「私、一年の水無月あかねと言います、高村先輩に聞きたい事があって」
「私に聞きたい事？一体何？」
「あの、孝之先輩の事、どう思ってます？」
「孝之・・・・ね・・・そうね・・・、まあ、私がここにいる時、何してるの？」とか、話しかけてきたのが彼だったわね・・・まあ、彼と一緒にいるのは楽しいわ、これが恋愛感情なのかどうかは、わからないけど・・・・それにしても、あかねちゃんだっけ・・・？孝之の事を聞いてくるなんて、好意を持っているって事なのかしら？」
「いえ、違います、孝之先輩が私にしつこく迫ってくるので、私は嫌なんです、だから先輩と仲良さそうな人がいるって聞いたので、話しかけてみたんです」
「そうだったの・・・孝之、そんな事言ってなかったわね」

「なので、高村先輩、孝之先輩の事が好きなら、ガンガンアタックして下さいね？それじゃあ」
そう言って、俺は、屋上から出て行く事にした。
これでよしっと、次は他のキャラのところにでも行く事にしたのであった。

～第三話～一日目～高村菫～（後書き）

俺かの書いていたら、全部いきなり消えたので、こっちの物語を書く事にしました。
この物語もよろしくです～

～第四話～一日目～風見理子～（前書き）

はい、零堵です
続きの話です。バグって消えたので、編集しました。

～第四話～一日目～風見理子～

屋上に行った後、次に向かったのは、図書室に行く事にした。
何故図書室に行くのかと言うと、図書室の中に、攻略対象キャラがいるからである。
図書室はすぐに見つかり、まあ部屋名に図書室って書かれてあるからここがそうなんだろ～な・・・とか、思ってしまった。
図書室の中に入ると、そこは古ぼけた棚がいっぱいおいてあって、本の数も結構沢山あった。
俺は、その中を歩きながら、目標の人物を探していると、本を読んでいる彼女を見つけたので
声を掛けてみることにしたのであった。
「あの、風見先輩ですよね？」
「・・・は、はい？そ、そうですが・・・」
俺が話しかけたのは、ストレートな緑色の髪の色をしている人物で、二年生の風見理子であった。
普通に考えて、ありえねえ色だろ？とか思うのだが、そこは深く考えない事にした。
「私、一年の水無月あかねって言います、風見先輩に言いたい事があって来たんです」
「わ、私に言いたい事・・・？一体何の用？」
「実は、孝之先輩の事で、知ってますよね？孝之先輩の事」
「孝之君？ま、まあ知ってるけど・・・」
「私、孝之先輩に言い寄られて、本当に困っているんです、孝之先輩の事、どう思ってます？」
「どう思ってるって・・・孝之君は、私が図書室に本を返しに行った時にぶつかって、「大丈夫？持ってあげるよ？」って言って来たけど・・・それから、私によく話しかけて来て・・・それで、あ、この人は優しい人なんだな・・・ってちょっと思っただけで・・・」

「じゃあ、嫌いなんですか？」
「い、いや・・・別に嫌いって訳じゃ・・・」
「じゃあ、好きなんですね？だったら、がんがんアタックしてみてはどうですか？」
「で、でも・・・私、引っ込み体質だし・・・かわいくないし・・・」
「先輩、可愛いですよ？」
何でそう言えるのかと言うと、この風見理子は眼鏡をかけているのだが、ゲームの終盤になると、コンタクトにするので、そしてその素顔が、かなりの美少女になるからである。
まだこの段階では、眼鏡をしているので、主人公との好感度が低い状態だな・・・と思われる。
「そ、そうかな・・・」
「ええ、自信持ってください！まずは話しかける事から大事ですよ？」
「そ、そうよね・・・・・う、うん、頑張って見る・・・」
「私、応援してますね？じゃあ、用件はこれだけなので、お邪魔しました」
そう言って、俺は図書室から出て行く事にした。
うん、こんな感じでいいだろ、あとはどうなるかって感じだな・・・って思い
次にどうしようか、考えていると、キーンコーンとチャイムが鳴ったので
まだ攻略対象キャラがいるのだが、声をかけるのは放課後にするか・・・と決めて
自分のクラスに戻る事にした。
クラスに戻ると、笹村理恵子が話しかけてきた。
「あかね？どこ行ってたの？私、聞きたい事あったのにさ？」
「ちょっと用事があってね・・・移動してたんだ」
「ふ～ん・・・まあいいわ、授業始まるし、授業終わったら聞くわ

ね」

「う、うん、分かった」

そう言って、理恵子は自分の席に戻る。

俺も自分の席について、午後の授業を受ける事にしたのであった・・・

～第四話～一日目～風見理子～（後書き）

アクセス数すごいですね、ほんと・・・
読んで下さり、お気に入りにも入れてくださってありがとうございます。
あとジャンル別週間ランキング（学園）に載りました。順位も結構上位なので、嬉しいです。
これからもよろしくお願いします。

～第五話～一日目～沖島ユウ～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話を投稿します。

～第五話～一日目～沖島ユウ～

午後の授業も無事というか、いとも簡単に終わった
授業が終わったので、早速行動にうつそうとすると、笹村理恵子がやって来て、こう言ってきた。
「あかね～？聞きたいんだけどさ？」
「な、何？理恵子？」
「孝之先輩の事好きなんでしょ？告白とかしたの？」
「い、いや・・・でも、なんでそんな話に？」
「いや、だってあかねが言ってたじゃない、最近気になる先輩がいるのってさ？で、私なりに調べたわけですよ？で、候補にあがったのが孝之先輩ってわけ？で？告白するんでしょ？」
「・・・いや、わかんないかな・・・」
「ふ～ん・・・まあ、私は応援するわよ？頑張りなさい？あかね」
「あ、ありがと、じゃ、じゃあ私は、行く所があるから・・・」
そう言って、教室から出ていく。
うん、応援されても、困るのだが・・・
とりあえず気を取り直して、主人公のいるクラス、2年2組に向かう事にした。
何故、向かうのかと言うと、そのクラスの中に、攻略対象者がいるのである。
2年2組は、直ぐに見つかって、教室の中に入る。
教室の中は、数人の生徒がいて、帰り仕度をしている者や、話し合っている者もいた。
その中に目標の人物を見つけて、声をかける。
「あの、ちょっと来て下さい」
「え・・・？僕に？」
「はい、貴方にです」
そう言って、手を掴み、二人で教室の外に出て、人気のない場所に

たどり着いた。
人気のない場所にたどり着いて、手を離す。
「一体何なのかな・・・？こんな所に僕を連れ出して・・・・え～っと・・・君は・・・」
「私は、一年の水無月あかねって言います。沖島ユウ先輩に話がありまして」
「僕に話？一体何・・・まあ、この状況から察すれば・・・ある程度予想はつくけど」
「じゃあ、単刀直入に言いますね・・・、先輩・・・女ですよね？」
そう、この沖島ユウは、男子の制服を着ているのである。
姿は、黒髪のショートに、結構背が高く、水無月あかねとの身長差が、十Ｃｍも違うのである。
普通に見た目は、結構かっこいい美男子に見えるが、ゲーム「ラブチュチュ」だと、プロフィールを見た時、男装をしていると書かれてあったので、女と確信しているのであった。
「な、何の事・・？僕は、男だけど・・・」
「そうですか？じゃあ・・・服脱いでくれます？」
「・・・え！？ちょ、ちょっとそれは出来ないかな・・・ここで脱ぐ事じゃないし・・・」
「脱げないんですか？じゃあ、やっぱり女ですよね？」
「だから、そうじゃなくて、そ、そう、僕、体に傷があって、それを見せたくないんだ、だから・・・」
「じゃあ、えい」
そう言って、俺は、沖島ユウの胸を鷲掴みにする。
うん、小さいけど、柔らかい、この自分の体と同じサイズぐらいなのかも？と思ってしまった。
「い、いきなり何するの！」
そう言って、俺を突き飛ばす。
「先輩の胸、柔らかかったです、やっぱり女の子ですよね？私、先輩が女の子って知ってたから、こんな人気のない場所に連れ出した

んですよ？」
「・・・・よく、僕が女の子と分ったね・・・、秘密にしといたのに・・・」
「大丈夫です、先輩？私、誰にも先輩の事、言いふらしたりしませんから」
「ほ、ホント？」
「はい、で、先輩に聞きたい事があるんです、先輩の同じクラスの、初崎孝之先輩の事って、どう思ってます？」
「孝之の事？う～ん・・・ま、まあ一緒に遊んだりして、ちょっとかっこいいな・・・とか、思った事はあるけど・・・なんでそんな事を聞くの？」
「私、孝之先輩に言い寄られてるので、それを回避したいんです、孝之先輩の事が好きだったら、行動してくれると嬉しいんですが・・・」
「行動ね・・・、ま、まあ、僕から言わせると、孝之って僕の事、男と思ってると思うんだけど・・・、自分からカミングアウトとか、してないし・・・」
「自分からは、しないんですか？」
「しないよ～、ま、まあ、バレタら正直に話すけど・・・」
「そうですか、私は、応援してますから、頑張って下さい、沖島先輩、じゃあ、、話す事はこれだけなので、私は行きますね」
そう言って、俺は、沖島先輩から、離れて行った。
うん、こんな感じでいいかな・・・まあ、あとは行動する事を、期待するしかないか・・・
さてと、他の三人に声をかけたので、あともう一人いるので、俺は、その人物に会う事に決めて、校舎内を探す事にしたのであった。

～第五話～一日目～沖島ユウ～（後書き）

この四日間で、ユニークアクセス数が６０００超えしました。
読んで下さり、お気に入りにも登録してくれて、ありがとうございます。

～第六話～一日目～西村舞～（前書き）

零堵です。
続きの話、投稿します。

～第六話～一日目～西村舞～

あと一人で、攻略対象キャラ全てなので、俺は、校舎内を探す事にした。
まず、屋上に行って見る。
屋上は、夏の日差しで、結構暑く、長くいると汗が出てくる感じだった。
その中にいるのは、三年の高村菫だけだったので、ここにはいないな・・・と、思い、違う場所を探してみる。
次に向かったのは、図書室に向かった。
図書室は、昼休みと違って、人が沢山いたので、目標の人物を探してみる。
見つけたのは、本を読んでいる、二年生の風見理子を見つけた。
理子を見つけたので、俺は、聞いてみる事にした。
「風見先輩、こんにちは」
「あ、あかねちゃんでしたっけ？ま、また何か？」
「あのですね・・・西村先輩の居場所って、分かります？」
「西村さん？・・・・西村さんなら、今頃、校庭じゃないかしら・・・、さっき見かけたし・・・」
「ありがとうございます」
そう言って、理子先輩と別れる。
校庭か・・・、とりあえずまだいると信じて、校庭に出てみる。
校庭には、部活動をやっているのか、結構沢山の生徒が、体操着を着て、動いていた。
その中にひときわ目立つ存在を探してみると、見つけた。
体操着を来て、運動場を走っている、西村舞を見つけたのである。
何で、目立つ存在なのかというと、この西村舞は、髪の色が水色なのである。
水色の髪にポニーテールに巨乳なので、かなり目立っている。

ゲーム「ラブチュチュ」だと、陸上部と言う設定なので、今の時間だと、走りこんでるんだな・・・と、思った。
ちなみにこの西村舞は、主人公の幼馴染という設定で、家も隣同士、性格もよし、料理も上手なので、男だった俺から言わせると、主人公に対して、リア充死ね！って思った事も何度かあった。
今、練習中見たいなので、練習が終わったら、話しかける事に決めて、練習が終わるのを待ってみる。
ず～っと練習風景を見ていて、そしてどうやら練習が終わったので、西村舞に話しかけた。
「西村先輩、こんにちは」
「あら？あかねちゃんじゃない、一体私に何の用？」
「西村先輩に聞きたい事あったんです、孝之先輩の事で」
「孝之の事？また、あの馬鹿が何かやらかしたの？」
「はい、まあ・・・・それで、西村先輩は、孝之先輩の幼馴染ですよね？」
「まあ、世間一般的にはそうね、家も隣同士だし」
「じゃあ、孝之先輩の事って、どう思っています？付き合いたいとか思ってませんか？」
「あの馬鹿、せっかく私が、遊びに行こうとか誘っているのに、断るのよ？二人きりで行こうと思ってたのに・・・それに、孝之のためにお弁当とかも作ってあげてるのに、感謝の気持ちもないのよね・・・まあ・・・私が好きでやってるんだけど・・・」
「やっぱり好きなんですよね？」
「そう言われれば・・・・・・そうよ・・・、もしかして、あかねちゃんも孝之の事が？と言う事は、ライバルになるわけ？」
「いえいえいえ、私なんかが孝之先輩の事が、好きな筈ないじゃないですか、先輩？実はですね？孝之先輩の事を好きな人、他にも三人ぐらいいるんです、すっごいモテますから、孝之先輩、きっと他の女性から、声をかけられてるとか、ありますよ？」
「そうなの？ほ～・・・それは、知らなかったわね～？孝之に問い

ださないと！」
「だから、孝之先輩の事が好きなら、ＧＥＴして下さいね？私としても、その方がいいですし、じゃあ、よろしくお願いします」
そう言って、お辞儀をしてから、西村舞から離れて行った。
よし、これで、攻略対象全員に声をかけたから、あとはどうなるかって感じだな？
学校に残っていると、主人公に声をかけられそうなので、水無月あかねの家に、戻る事にしたのであった。

～第六話～一日目～西村舞～（後書き）

うん、毎日のアクセスが二百人以上って凄いですね。
こんな事初めてで、ちょっと驚きです。
これで、攻略対象キャラ全て、揃いました。
うん、ここからどう書くかな・・・って、悩みます。
ちなみに自分は、ゲームはあまりやらなくて、やると言っても最近は、落ちげーの「ぷよぷよ」ぐらいですかね

～第七話～一日目～夜～（前書き）

続きの話です。

～第七話～一日目～夜～

主人公の攻略対象キャラ全員に、声をかけたので、もうやる事はないな・・・と思ったので、家に戻る事にした。
水無月あかねの家に戻ると、出迎えてくれたのは、水無月あかねの母親の、水無月文香である。
「あ、おかえりなさい、あかね」
「ただいま」
「そういえば、電話あったわよ？」
「電話？」
「そう、え～っと確か、初崎君だったかしら？「あかねちゃんいますか？」って言ってきたわ」
「そ、そうなんだ・・・」
「いないって言ったら、「じゃあ、また掛けなおします」と言ってたけど、あかね？」
「な、なに？」
「初崎君って、あかねの彼氏？」
「ち、違う」
「そう？でも、私はあかねが彼氏を作るのは、全然ＯＫよ？あ、家にも招待していいからね？」
「しないよ・・・じゃあ、着替えてくるね・・・」
なんか、文香さんも、俺が彼氏出来るの肯定派なのか・・・と、思ってしまった。
水無月あかねの部屋に、辿り着いて、制服とスカートを脱ぐ。
朝と同じく、白色のブラとパンティーが見えた。
自分で言うのもなんなんだが、結構色っぽいのではないのだろうか？
そんな考えをやめて、タンスにしまってある服を見てみると、スカートやらショーツ？やら色々あって、結局何に決めたかと言うと、ジャージがあったので、ジャージを着る事にした。

家の中でジャージ・・・男の俺だったら、そんな事しなかったな？
そう言えば・・・
そう思い、着替え終わって部屋の外に出ると、文香さんが話しかけてきた。
「あら、あかね？なんで家の中でジャージ？」
「この方が動きやすいから？」
「まあ、家で何を着ようが私は、何も言わないけど・・・、あ、お風呂沸いてるから、入っちゃいなさい、ジャージよりパジャマ用意するわね？」
そう言って、文香さんは、移動した。
風呂か・・・、うん、どうしよう・・・ま、まあ文香さんがそう言うので、入るかな・・・と、思い、風呂に入る事にした。
浴室と書かれた部屋の中に入り、籠が置いてあったので、そこに服を入れる事にして、服を全部脱いで、風呂の中に入る。
中は、結構ゆったりとしたスペースがあり、浴槽も足が伸ばせるぐらいに、広かった。
まず、風呂に入る前に体を洗おうと決めて、シャワーのノズルを捻る。
シャワーから、お湯が出てきて、温度も丁度いい設定にしてあった。
そして、体を洗う事にして、シャワーを浴びて、自分の体を見てみる。
なんというか・・・乳首の色が薄ピンク色をしていて、巨乳ではないので
小さな突起がある感じだった。
「でも、貧乳が好きって言う奴が、結構いるんだよな・・・」
そう呟きながら、体を石鹸で洗っていく。なんというか・・・いいにおいのする石鹸で、肌を洗っていると、結構スベスベな肌だった。
体をしっかり洗って、下のほうも洗う事にして、まじまじと見てみる。
男のシンボルが無く、穴があいているだけで、毛が全くなかった。

どう洗っていいか、わからなかったが、慎重に洗う事にした。
洗い終わって、考えてみる。この中に、男のアレを入れるんだよな・・・と
男だった時に、見たエロビデオに出てくる女優は
「もっと、もっと突いて！気持いいわ～！あん・・・」とか言っていたが、あれは本当に気持ち良かったのか？とか思う。
最初は滅茶苦茶痛いとも聞いた事あるし、やっぱり男だった俺としては、男と性行為はやりたくないな・・・と、思ったのであった。
それに、この自分の体って経験あるのか？と思ったが、そこは深く考えない事に決める。
かと言って、女同士でやるのもどうかと考えたが、結論から言うと
「男の姿に戻ってから、女と愛し合いたい」と、こう決めたのである。
最後に頭をシャンプーで、洗い流して湯船に浸かる。
うん、いい温度に設定されていて、結構気持ちよかった。
長く入ってると、のぼせてしまいそうなので、早めに湯船からあがった。
籠の中に用意されていたのは、ピンクのブラとパンティー
それにピンク色のパジャマだったので、結局これを着る事にした。
ブラの付け方がよく分からなかったが、なんとか付ける事に成功して、ピンクのパジャマを着る。
鏡があったので、自分の姿を見てみると、映っているのは、水無月あかねの姿であり
まじまじと見てみると、やっぱり美少女に見える。
絶対に男とかに、声掛けられるレベルだよな・・・この容姿だと・・・
そう思いながら、髪をタオルで乾かして、浴室から出ると、文香さんが話しかけてきた。
「あら、あかね、あがったのね」
「あ、うん」

「じゃあ、ご飯にしましょう、もう出来ているわよ」
「は～い」
そう言って、リビングに向かう。
リビングに用意されていたのは、カレーだった。
そのカレーをスプーンで食べてみると、料理上手だからか、物凄く美味い。
つい顔が緩んで食べていると
「あらあら、にこにこして食べてもらうと、作ったかいがあったものね？」
「本当に美味しいから・・・」
「そう言ってくれて、ありがとね？あかね」
うん、ほんとにいい人だ。めちゃめちゃ俺の中では、かなりの好感度があがっているのだが。
食べ終わって、あかねの部屋に戻る。
時刻を確認してみると、夜の１０時となっていて、何をしようかと迷い、とりあえずこれからの事を考えてみる。
今日は、主人公の攻略対象者全てに声をかけたので、これなら主人公との恋愛フラグを回避出来るのではないだろ～か・・・と思われる。まあまだ日にちは、六日間あるので、どうなるかは今だに不明なのだが、とりあえずこの事を記録しようと思い立って、ノートに今日の出来事を記す事にした。
ノートにこう書く。「一日目、今日は他の四人と接触、主人公との出会い確立０」と、書いた。
他にする事もなかったので、ベットの上に乗る。
なんだが眠くなったので、寝る事に決めた。
もし寝て、明日になり、元の姿で元の世界に戻ってたらいいな・・・と念じながら目を瞑る。
こうして、俺の一日が終了したのである。

～第七話～一日目～夜～（後書き）

一日目終了
この物語を読んでくださって、ありがとうございます。
他の作品も投稿してあるので、よかったら見てみてくださいね。

～第八話～二日目～朝～（前書き）

零堵です。
続きの話です

～第八話～二日目～朝～

どこからか、声が聞こえる。
「・・・あかね、起きなさい？遅刻するわよ」
そんな声が聞こえたので、目を開けてみる。
視界に写りこんだのは、水無月文香さんの姿だった。
どうやら、元の世界や元の姿に戻る事も無く、俺の姿は、水無月あかねの姿のままみたいである。
状況から察するに、文香さんは、あかねを起こしに来たんだな・・・と思う。
「目が覚めた？あかね」
「う、うん」
「じゃあ、制服に着替えなさいね？ほんとに遅刻しそうだからね？あ、朝食は用意してあるから、着替えてから食べに来なさい」
そう言って、部屋から出て行く。
改めて日にちと時間を確認してみると、七月二日の火曜日で、時刻は七時三十分となっていた
文香さんに言われたとおりに、着替える事に決めて服を脱ぐ。
現れたのは、ピンクのブラとパンティーで、ちょっと色っぽく感じられた。
昨日から着ているのは、ピンク色のパジャマだったので、それを脱いで、私立白稜高校の制服を着る。
制服とスカートは、折りたたんであったので、文香さんがやってくれたんだな・・・と思った。
昨日から着ているので、着方は全く問題なく、あまり時間をかけずに着る事に成功した。
そして鏡面台で、自分の姿を確認。
そこに写っているのは、制服とスカートを履いた水無月あかねの姿が映っていた。

うん・・・やっぱり戻っていないんだな・・・と、改めて実感
そして、これからどうするか考える。
確か、ゲーム「ラブチュチュ」では、水無月あかねを攻略対象にプレイをした時
今日はイベントフラグがあるのである。
確か、内容は「主人公と映画に行く」と言うラブイベントで、主人公があかねに声をかけて
デートに誘うと言う内容だった気がする。
と言う事は、今日、主人公に声をかけられる事になるんだろうな・・・と思う。
それにしても、主人公の顔って一体どうなんだろ・・・気になったがまあいずれ会う事になるので、深く考えない事して、あかねの部屋から出る。
部屋から出て、リビングに向かうと、トーストとベーコンエッグが用意されていた。
「あら、ちゃんと着替えたわね？時間がないわよ？」
「分かってるよ、いただきます」
そう言って、朝食を取る。簡単な朝食だったが、味がさっぱりしていて、結構美味い。
少量だったので、直ぐに食べ終わり、出かける事にした。
「じゃあ、行ってきます」
「行ってらっしゃい、あ、そうだ、あかね？」
「何？」
「夜、食べたい物とかある？リクエスト受け付けるわよ？」
「う～ん・・・じゃあ、スパゲッティで・・・駄目かな？」
「いいわよ、スパゲッティね？判ったわ、じゃあ行ってきなさい」
「は～い」
そう言って、外に出る。
うん、ほんとにいい人だ、文香さん。ゲームだと、攻略対象キャラじゃないんだよな・・・

スタイルいいし美人だし、かなり男にモテルのではないんだろうか？
俺の中での好感度で言うと、今、一番なのが文香さんで、二番が理恵子ぐらいな感じなのである。
そんな事を考えながら、学校へと向かう。
さて、まず学校に行ってやる事は「主人公とのイベントフラグを回避」と言う方向で、動こうと思う。
そう決めて、行動に移す事にしたのであった。

～第八話～二日目～朝～（後書き）

アクセス数が一日平均３００人以上って、凄いですね。
まだ連載して一週間もたっていませんのに
これも読んで下さって、ありがとうございます
この作品にもイラストを載せようかな・・・とか思うのですが、全くイラストを描く時間が取れません。
なので、イラストは無いと思います。
これからもこの作品をよろしくお願いします。

～第九話～二日目～昼～（前書き）

零堵です。
続きの話です。

～第九話～二日目～昼～

俺は、とりあえず「主人公とのラブイベントを回避」という方向で動く事にした。
通学路を歩いて、目的地、私立白稜高校に辿り着く。
自分のクラス、一年四組の中に入って、水無月あかねの席に座る。
鞄を置いて、中身を机の中に入れる作業をしていると、キーンコーンと鳴ったので
授業が始まるみたいだった。
授業内容は比較的に簡単な方で、別に聞いてなくてもいいんじゃないか・・・とか思いうつぶせになって、寝て見る事にした。
寝て見ても、注意も何もされず、時間が過ぎて、あっという間に授業が終わる。
うん、やっぱり問題ないんだな・・・これだと
さぼっても大丈夫なんじゃないか？と思った程である。
授業が終わったので、どうしようかな・・・と思っていると、俺に話しかけてきたのは
笹村理恵子だった。
「あかね？」
「何かな・・・？理恵子」
「さっきの時間寝てたでしょ？ちゃんと受けなくてよかったの？」
「だって、注意されなかったし・・・」
「まあ、そうね～、今の時期は、授業を聞いていても、あまり意味ないからね？内容もどうせ忘れるし」
そういうものなのか？
「あ、次の授業が始まるから、戻るわね？」
そう言って、理恵子は自分の席に戻る。
そして、次の授業が始まった。
さっきと違って、なんか先生がかなり怖い感じの人だったので、寝

るのは諦めて
普通に授業を受ける事にして、時間が過ぎる。
そして、授業が終わって昼休み、昨日と同じく
学食を食べに行く事にした。
学食に辿り着くと、人がたくさんいて、結構にぎわっている。
券売機の前に並んで、俺の番になり、昨日はきつねうどんを食べたので、今日はらーめんにしてみた。
らーめんは、直ぐに出て、それを食べてみる。
味は、まあ普通だった。これならカップ麺でも変わらないんじゃないか？と、思ったりした。
飯も食べ終わり、教室に戻ろうとすると、声をかけられた。
「あかねちゃん」
「はい？」
声をかけてきたのは、さわやかな感じの青年風な感じだった。もしかして・・・こいつが・・・
主人公の初崎孝之なのだろ～か？見た感じだと、うん、結構もてそうに見える。
「昨日電話したけど、家にいなかったよね？でね？映画のチケットあるんだけど、一緒に行こう？じゃあ待ち合わせは、駅前でいいね？」
なんか、了承する事を前提に話が進められているんだが・・・
「誰がお前なんかと行くか！リア充は失せろ！」
そう言った瞬間、目の前が急に真っ暗になり、気がつくと、主人公が目の前にいて
こう言ってくる。
「昨日電話したけど、家にいなかったよね？でね？映画のチケットあるんだけど、一緒に行こう？じゃあ待ち合わせは、駅前でいいね？」
・・・会話がさっきと同じだった。もしかして・・・
「・・・・・いきません」

そう言うと、再び目の前が真っ暗になり、気がつくと、主人公が目の前にいて、再びこう言ってくる。
「昨日電話したけど、家にいなかったよね？でね？映画のチケットあるんだけど、一緒に行こう？じゃあ待ち合わせは、駅前でいいね？」
・・・ＯＫ、分かったぜ・・・。
「はい、行きます」
「じゃあ、決まりだね、駅前で待ってるよ」
そう言って、主人公はいなくなる。
原理が分かった。どうやら主人公との選択イベントが発生して、これは了承しないと無限ループするみたいだな・・・と、さすがトゥルーエンド百パーセント状態。
そう簡単にはイベント回避出来ないか・・・と、思った。
この会話で、俺のやる事がきまった。それはと言うと
「主人公の選択イベントを受けながら、ループしないで、バットエンドを目指す」と。
これはかなり難しいのではないんだろ～か・・・？とりあえず、今日のラブイベントは
主人公と映画館に行くってきまっているので、不本意だが
一緒に映画館に行く事にするしか無いみたいなので、どう行動するか考えながら
自分のクラスに戻る。
そして、午後の授業を受ける事にしたのであった。

～第九話～二日目～昼～（後書き）

やっと主人公登場です。
あと、この物語をお気に入りに入れて下さって、誠にありがとうございます。
今日で連載初めて一週間です～
うん、この一週間で毎日のアクセス数が３００以上って、ほんとすごいですね・・・

～第十話～二日目～映画館デート～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話を投稿します。

～第十話～二日目～映画館デート～

午後の授業も簡単だったので、普通に聞きながらノートに、黒板に書かれた文字を書く作業をした。
そして、授業が終わったので、行動にうつす事にした。
主人公との映画に行く事は決まっているので、おしゃれして出かけるとかしないで、この制服のまま向かうとするか・・・と考えて、鞄を持って、校舎を出る。
そういや・・・駅って、どっちの方角だ？と思い、標識や地域案内図を見て、駅の場所を確認してみる事にした。
地域案内図が近くになったので、それで駅の場所を確認、駅の場所は、結構遠くではなく、水無月あかねの家から、反対方向を数分歩けば、辿り着くみたいであった。
行きたくはなかったが、回避出来そうもないので、駅に向かう。
数分歩いて、駅の待ち合わせ広場に辿り着く。主人公の姿を、探してみると・・・いた。
主人公も制服のままで、時間を気にしながら誰かを待っている風に見える。
まあ、待っているのは俺だと思われるのだが・・・
とりあえず、俺は、主人公に話しかける事にした。
「先輩、お待たせしました」
「あかねちゃん、待ってたよ？じゃあ、行こうか？」
「はい」
そう言って、主人公はいきなり俺の手を握ってきた。
「あの・・・先輩？いきなり手を握られても・・・」
「俺がそうしたいんだ、じゃあこっちだよ」
これって強制なのか？はっきり言って、嫌だったが・・・、しょうがないから手を繋いだまま
映画館に向かう事になった。

数分歩いて、映画館に辿り着く。
人が結構いて、賑わっていたりしていた。
「あかねちゃん？一体何を見る？」
「え～っと・・・」
俺は、上映されている作品を見てみる。
上映されているのは、アクション物の「戦いとは非常なり」と
恋愛物の「あたしと貴方のらーめん日和」
ホラー物の「ゾンビって、くさいっす・・・」が放映されているみたいである。
うん・・・どれも内容が物凄く気になるのだが・・・、この三つの中で
どれがいいか・・・と悩んで、こう言った。
「じゃあ、私はホラー物が見たいです」
「じゃあ、これだね？了解」
そう言って、チケットを受付に渡す。
そして、受付の人が「もうすぐ上映時間なので、場所はあちらです」と案内してくれた。
映画館のホールの中は、巨大スクリーンと座席があって、俺と先輩は後ろの方に座った。
マジで気になるな・・・一体どんな内容なんだ？とか、ちょっとわくわくするのだが・・・。
そして時間がきて、あたりが真っ暗になり、上映がスタートする。
画面にいきなり男が出てきて、それが交通事故にあい、いきなり死亡男が目が覚めると、そこは病院の中にいて、一回死んだ筈なのに、ゾンビとして生き返っていた。
その男が、ゾンビから普通のもとの姿に戻る為に、頑張ると言う話みたいである。
うん・・・すっかり夢中で見てしまった。
二時間で上映が終わって、外に出ると、もう日が落ちて真っ暗だった。

「今日は楽しかった？あかねちゃん？」
「はい、楽しかったです、いい映画でしたね？まさか、あんな風なラストになるとは思ってませんでした」
「そうだよね、あれは意外だったな～、うん、あかねちゃんが喜んでくれたからよかったよ」
そう、さわやかスマイルで言ってきた。うわ・・・普通の女の子だったら
かっこいい・・・とか思っちゃうんじゃないか？まあ、俺は、普通じゃあないんだが・・・。
やべ～・・・なんか、顔赤くなっていないか？俺・・・。
「あ、はい・・・・誘ってくれて・・・ありがとう・・・」
「いやいいよ、じゃあ暗くなったし、送っていくね」
「あ、はい・・・よろしくです」
さりげない気遣いも完璧だな・・・こいつ・・・
うん、絶対にこいつになんか惚れてやらないぞ！と、決める。
そう思いながら、主人公に家まで、送って貰ったのであった。

～第十話～二日目～映画館デート～（後書き）

アクセス数、一週間連続３００人以上達成です。
ありがとうございます～

～第十一話～二日目～夜～（前書き）

零堵です。
続きの話です。

～第十一話～二日目～夜～

主人公に送ってもらって、水無月あかねの家に辿りつく。
家に辿り着いて、孝之先輩は、こう言ってきた。
「じゃあね？あかねちゃん」
「あ、はい・・・送ってくれてありがとうございました」
「いえいえ、じゃあ帰るね？では」
そう言って、孝之先輩はいなくなる。
うん・・・とりあえず、今日のイベントは終わったので、これから起こるイベントは無いな・・・と、思い家の中に入る。
家の中に入ると、エプロンをつけた、水無月あかねの母親水無月文香さんが、出迎えてくれた。
「お帰り～あかね」
「ただいま」
「あかね？朝に言っていた、スパゲッティーだけど、もう出来てるから、着替えて食べにいらっしゃい」
「は～い」
そう言って、俺は、水無月あかねの部屋の中に入る。
部屋の中に入って、制服とスカートを脱いで、畳んでおく。
服が用意されてあるみたいなので、それを着る事にした。
なんかもう・・・この体に慣れたのか
自分の体を触ったり見たりしても、何にも感じなくなってきたな・・・？
用意された服に着替えて、リビングに向かう。
テーブルの上に用意されていたのは、温かいスパゲッティーだった。
作りたてなのか、湯気が出ていて、結構美味しそうに見える。
「あ、着替えたのね？じゃあ、頂きましょう？」
「うん、頂きます」
そう言ってスパゲッティーを食べる。

うん、さすが料理上手、かなり美味い。あっと言う間に食べ終わって、おかわりも要求した。
食いすぎると太るとか、女の悩みだと思うが、そんなの一切考える事はしなく、おかわりを要求。
お腹が満杯になるまで食べて、休んでいると、文香さんが話しかけてきた。
「あかね？今日遅かったけど、何かあったの？」
「え～っと・・・先輩と映画に行ってた・・・」
「あら？じゃあ・・・その先輩って、もしかして昨日電話してきた、孝之君？」
「う、うん」
「へ～あかね・・・やるじゃない？じゃあ、家に来る事もあるのかな？」
「いや、そんな事ないよ・・・？」
「私は、家に招待してもいいわよ？あ、でもね？」
「でも・・・？」
「性行為をするんだったら、ちゃんと避妊はしなさいね？まあ子供が欲しいって言うなら、私は止めないけど」
冗談じゃない、誰がそんな事をするか！と、思った。
「い、いや、しないよ！」
「そう？まあ、高校生なんだから高校生らしい付き合い方しなさいね？あ、お風呂沸かしてあるから、入って来なさい」
「う、うん・・・そうする」
そう言って、俺は浴室に行く事にした。
着てる服を脱いで、タオルを持って、浴室の中に入る。
まず初めにシャワーを浴びて、石鹸で体を洗う事にした。
昨日も洗ったので、もうやり方は大体分かっているので、念入りに洗っていく。
胸とか腰とか足首とかも洗って、最後に頭を洗う事にした。
シャンプーで頭を洗いながら考える。

確かに映画は楽しかったと、まあ主人公と一緒だったのが、残念だったのだが・・・と
洗い終わって、浴槽に浸かる。
風呂の温度は、いい感じに設定されていて、結構気持ちよかった。
長湯すると、のぼせてしまうので、早めにあがって、用意されている服に着替える。
昨日と違って、下着の色が青だった。なかなか色っぽいデザインでもある。
これを履いて、男を誘惑とか普通の女の子だったらするのかな・・・とか、思ったが
俺はそんな事しないぞ！と誓い、下着とブラをつける。
そして青色のパジャマが用意されていたので、それを着て、あかねの部屋に入る。
部屋に入って、ノートにこう書く。
「二日目、主人公に映画に誘われる、なるべく好感度を下げる方向で動こうと思う」と
そうノートに書いて、時計を見てみると、結構遅い時間になっていたので、ベットに入る事にした。
ベットに入ってから、考える。
明日はどう動こうか・・・と、そう考えていると、眠くなってきたので、瞼を閉じる事にした。
こうして、二日目が終了したのである。

～第十一話～二日目～夜～（後書き）

零堵です。
この物語、書いてて結構楽しいですね。
毎日のアクセス数が３００以上と言うのが、自分の中では驚きです。
あと、こんな物語をお気に入りに入れて下さって、誠にありがとうございます。
これからも、この物語をよろしくお願いします。

～第十二話～三日目～朝～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第十二話～三日目～朝～

目が覚めると、見慣れた天井だった。
ベットから降りて、時刻と日付を確認してみると
七月三日、水曜日の7時と表示されている。
結局元の姿には戻らないのか・・・と、思い、今日の出来事を確認してみる。
確か、ゲーム「ラブチュチュ」だと、主人公から声をかけられる事は無かった筈。
じゃあ、今日のやる事は、「他の攻略対象者と主人公をくっつける」という方向で、動こうと思う。
でも、誰から声をかけるかだが・・・一番声をかけやすいのは
やはり幼馴染の西村舞あたりから、話しかければいいのでは？とか思ったりした。
早速行動にうつす事に決めて、まず着替える事にする。
着てる青色のパジャマを脱いで、下着姿になる。
下着もパジャマと同じく、青色だった。
うん、まじまじと見てみると
やっぱり色っぽい、結構素材もいいのを使ってるんじゃないか？と、思われる。
そう考えてから、制服とスカートを履く。
制服に着替え終わって、鏡面台で自分の姿を確認する。
そこに映っていたのは、水無月あかねの姿で、ちっとも元の男の姿には戻っていなかった。
鏡を見ながら、髪型とかを調整して数分後
決まった形になったので、うん、これでいいか・・・と思う。
うん・・・この体になって、なれたんだろうか・・・とか思い
というか、本当に俺・・・戻れるのだろうか・・・？とも、思ってしまった。

まあ、それは深く考えない事にして、水無月あかねの部屋から出る。
部屋から出て、リビングに行くと
テーブルの上に、ご飯とみそ汁、焼鮭におしんこ
朝の朝食セットみたいな感じの朝食が出来上がっていた。
そして、水無月あかねの母親の水無月文香さんが、話しかけて来る。
「おはよ？あかね、今日は遅刻する事なく、起きれたのね？」
「う、うん」
「朝食出来てるから、食べて学校に行きなさいね？」
「は～い」
そう言って、俺は、用意された朝食を食べる。
さすが料理上手、和食もかなり美味かった。
直ぐに食べ終わって、鞄を持って、外に出ようとすると、文香さんが話しかけてきた。
「あ、そうだ、あかね？」
「何？」
「今日、遅くなるから、夕飯用意出来ないかも知れないわ、出来なかったらごめんなさいね？」
「分かった、出来て無かったら、自分で作るよ」
「そうしてもらえると助かるわ、あれ？それにしてもあかね？料理出来たっけ？私、あかねが料理を作っている所、見た事がないのだけど」
「私だって、やろうと思えば出来るよ・・・」
「そう？じゃあ、作ったら私にも食べさせてくれない？ほんとに上手なのか気になるしね？」
「あ、うん、わかった、じゃあ、いってきま～す」
そう言って、家を出る。
そうか・・・文香さん、いないって事もあるのか・・・
まあ、料理に関しては、ちょっと自炊とかした事もあるので、自信はあるのだが・・・。
まあやるかどうかは分からないので、いなかった時に作ればいいか

な・・・
とか思い、学校に向かう事にした。
とりあえず、今日のやる事は「主人公と他の攻略対象者の仲を良くさせる」
と言う方向で動こうと思うのであった・・・

～第十二話～三日目～朝～（後書き）

続きの話を投稿します。
この物語を読んでくださって、ありがとうございます～

～第十三話～三日目～昼、西村舞と遭遇～（前書き）

零堵です。
続きの話です。

～第十三話～三日目～昼、西村舞と遭遇～

俺は、まず学校についてからやる事は、他の攻略対象者と主人公の仲をくっつけると言う方針に決めた。
学校にたどり着いて、水無月あかねのクラスの中に入り、自分の席につくと
笹村理恵子が、俺に話しかけてくる。
「おっはよ～あかね」
「おはよう、理恵子」
「あかね？」
「何？」
「昨日さ？私、見たんだよね～先輩とデートしてたでしょ？」
「昨日・・・う、うん、私としてはデートって感じじゃなかったんだけど」
「え～？だって、先輩と手を繋いで二人で、歩いてたじゃん？二人っきりだからデートでしょ？」
「理恵子がそう思うのなら、そうなのかな・・・」
「そうだって、ついにあかねにも彼氏か～、ちょっと寂しいかも？なんてね」
「か、彼氏じゃないよ！それに、先輩が好きな人って他にもいるし、先輩凄くもてるから」
「ふ～ん、じゃあ、あかねも先輩の事、狙ってるんだ？」
「ね、狙ってないよ・・・」
「まあ、私は応援するわよ？頑張りなさい」
いや、頑張りたくないのだが・・・。
そんな感じに話していると、キーンコーンとチャイムが鳴ったので、授業を受ける事にした。
授業内容は比較的に簡単で、黒板に書かれた文字をノートに写したり、先生に当てられたので、教科書の文章を読む程度で、時間が過

ぎる。
授業が終わって昼、俺はと言うと、学食に行く事にした。
学食に向かうと、相変わらず人が多い、まあ皆考える事が同じなんだな・・・と思う。
俺も、並んでいるので並ぶ、そして数分たって俺の番になり、券売機のボタンを押す。
今日は、ハンバーグ定食にして見た。
食券を購入して、受付に渡して、すぐにハンバーグ定食が出たのでそれをもってあいている席を探していると、知っている人物を見つけたので、声をかける。
「西村先輩、隣り空いてるので、座っていいですか？」
そこにいたのは、主人公の幼馴染で、攻略対象キャラの西村舞先輩であった。
「あ、あかねちゃん、まあいいわよ、どうぞ」
「じゃあ、お邪魔しま～す」
そう言って、西村舞の隣の席に座る。
うん。改めてみると、水色の髪が綺麗で、胸も大きく、ほんとに美少女に見える。
「あかねちゃんは、ハンバーグ定食にしたんだ？」
「はい、先輩は、きつねうどんなんですね？あれ？先輩って、いつもはお弁当作ってるんじゃないんですか？」
「今日は、ちょっと寝坊しちゃってね・・・お弁当作る余裕なかったのよ・・・だから、ここで昼食を済ませようって思ったわけ、あかねちゃんはお弁当作らないの？」
「私は、作りませんね、朝はお母さんが用意してくれてるので、昼は学食中心です」
「そうなんだ」
「あ、そう言えば先輩」
「何？あかねちゃん」
「昨日、私、孝之先輩にデート申し込まれてたんです、今日も先輩

に話しかけられるのはちょっと嫌だな・・・って思ってますので、孝之先輩の事、遊びに誘ってみてはどうです？」
「ほ～・・・私が昨日、孝之の事探してたのに、そんな事があったのね？あかねちゃん、教えてくれてありがとね？そうね・・・確かに、孝之が他の女の子を誘うのはなんか嫌だわ、さっそく誘ってみるね」
「はい、先輩、頑張って下さい」
そう言って、俺は、ハンバーグ定食を食べ終わった。
食べ終わってから、こう言う。
「じゃあ、私は、戻りますので、先輩の事、よろしくお願いします」
「ええ」
そう言って、俺は教室に戻る事にした。
戻る途中、主人公の初崎孝之を見つけた。
こっちから声をかけるのは嫌だったので、俺は主人公に見つからないように移動する。
何とか見つからずにすんで、教室に戻る事に成功。あとは、先輩に会わないようにする事だな・・・と、思いながら、午後の授業を受ける事にしたのであった・・・

～第十三話～三日目～昼、西村舞と遭遇～（後書き）

この物語を、読んで下さってありがとうございます～
アクセス数も凄いですね・・・ほんと

～第十四話～三日目～午後、笹村理恵子と遊び～（前書き）

はい、零堵です
続きの話です。

～第十四話～三日目～午後、笹村理恵子と遊び～

午後の授業も普通に終わって、放課後。
俺は、どうしようかな・・・と悩んでいたりしていた。
そのまま帰ってもいいし、それとも他の攻略対象キャラに話しかけてみるのありか？とか、思っていると、笹村理恵子が話しかけてきた。
「あかね？」
「何？」
「今日さ？遊びに行かない？ゲーセン行こうよ？」
「ゲーセンね・・・」
「あ、もしかして予定入れてる？」
「いや、入れてはいないけど・・・」
「じゃあ、決まりね？早速行きましょう」
「あ、うん」
ま、理恵子と二人で遊ぶのもありか・・・と思い、俺はＯＫする事にした。
学校を出て、制服のまま街の中を移動して、駅前に辿り着き、駅から数分歩いた場所に、ゲーセンがあった。
そのゲーセンの名前は「ゲーマズ」と言って、なんか元の世界に出てくるお店の名前に、そっくりだな・・・とか思う。
その店の中に入ると、店内は異常にライトアップされていて、眩しいぐらいだった。
「じゃあ、あかね？どれからやる？」
「そうだなあ・・・」
俺は、店内を見渡して、置いてある機械を見てみる。
ビデオゲームに体感ゲームにリズムゲームやクレーンゲームなど、いろいろな機械が置いてあった。
ちなみに中身も元の世界にあった物と大体同じで、知ってるゲーム

がほとんどである。
「あ、そういえば理恵子は何が得意なの？」
「私？そうね・・・音楽ゲームは得意よ？あかね？あれ、やらない？」
そう言って理恵子が指さしたのは、ギターの形をしたリズムゲームで、「ギターミュージック」と書かれている。
「わかった、やろうか？」
「お？あかね？自信ありげ？」
「まあ、やった事ある物だから」
「ならＯＫね？早速始めましょう」
そう言って、お金を入れて二人同時プレイを選択する。
ギターを持ってみると、うん、なんかちょっと重い、女になって体力落ちたか？とか思ってしまった。
曲を選んで難しさをいきなりエキスパートにしやがった、うん・・・クリアできるか・・・？とか不安になったが、なんとかクリアする事に成功。二曲目も難しい曲に選曲されて、かなり指を使ったので、結構疲れてしまった。
クリアした後、理恵子がこう言ってくる。
「あかね・・・やるわね？まさかこんなにうまいなんてね」
「そう言う理恵子こそ、相当うまくない？」
「まあ、私も何回もやってるしね？これ、は～いい汗かいたわ」
「じゃあ、他のやろうよ？こればっかりやってると、指いたくなるよ？」
「まあそうね、あかねの言うとおりにしましょうか」
そう言って、俺と理恵子は、別のゲームをやる事にした。
次にやったのは、クレーンゲームをやって、ヌイグルミとお菓子を一つずつゲットする事に成功し、理恵子が最後に「プリクラ撮ろう～」とか言ってきたので、理恵子と一緒にプリクラを撮る事にした。
うん・・・こう言うの初めてだな・・・男だったら、デートって感じだと思うのだが・・・。

プリクラを撮り終わって、どうしようか考えていると、聞き覚えのある声が聞こえた。
「孝之、次、あれやろう？」
「あれ？どれだよ・・・」
「孝之は、僕とあれにしよう」
「ユウ・・・お前もか・・・」
「ちょっとユウ君、私の決めたのがいいって？」
「僕の方がいいと思うんだけど・・・孝之はどう思う？」
「俺に振るな～・・・」
そう言っていたのは、西村舞と沖島ユウと主人公の、初崎孝之だった。
そうか、ここに遊びに来てるんだな・・・
沖島ユウは男の格好をしているのだが、正真正銘女なので、一言で言うと
ハーレム状態じゃないか？とか思う。うん、リア充死ね！って言いたい。
「あ、先輩達も遊びに来てるみたいね？孝之先輩いるよ？声かけないの？」
「いいよ、邪魔しちゃ悪いし」
「そうね、その方がいいかも、なんか喧嘩してる風に見えるしね」
「うん、あ、それよりこれからどうする？」
「とりあえず遊んだし、もう、帰ろっか？」
「りょ～かい」
そう言って。お店から出て行く事にした。
店から出ると、理恵子がこう言って来る。
「今日は楽しかったよ？あかね、また遊ぼうね？じゃね」
「うん、さよ～なら」
そう言って、理恵子と別れる。
ここにいても、主人公に見つかる可能性があるので、俺は、家に帰る事にしたのであった・・・

～第十四話～三日目～午後、笹村理恵子と遊び～（後書き）

アクセス数すごいですね、ほんと・・・
読んで下さり、お気に入りにも入れてくださってありがとうございます。
あとジャンル別週間ランキング（学園）に載りました。順位も結構上位なので、嬉しいです。
これからもよろしくお願いします。

～第十五話～三日目～夜～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第十五話～三日目～夜～

笹村理恵子と別れて、俺はと言うと、水無月あかねの家に戻る事にした。
家に戻ると、家には鍵がかかっている。
呼び鈴を鳴らしても、返事がないので、どうやら文香さんが
留守だと思い、どうやって中に入ろうか・・・と考えて、鞄の中身を探してみる。
よく探してみると、鍵を見つけたので、それが家の鍵なのか不明なのだが
鍵穴にその鍵を差し込んで、回してみると、扉が開いたので、中に入る事に成功した。
中は誰もいなく、電気もついてないので、暗くなっている。
まず俺はと言うと、あかねの部屋に入って、制服を脱ぐ事にした。
制服とスカートを脱いで、下着姿になり、箪笥から着る服を選ぶ。
何にしようかな・・・と迷い、白色のサマーセーターと青色の半ズボンを着る事にした。
うん、通気性がいいからか、結構涼しく感じられるな・・・
着替え終わって、あかねの部屋から移動して、冷蔵庫を開ける。
色々な食材がおいてあり、何を作るか迷って、炒飯を作る事にした。
炒飯に必要な材料を冷蔵庫から取り出して、フライパンに油をひく。
そして、ご飯と玉葱と豚肉を炒めて、最後に卵を混ぜて、完成。
焦げ付く事無くできたので、まあまあかな・・・と、思ってしまった。
お皿に盛り付ける作業をしていると、扉の開く音がしたので、気になって見に行くと
文香さんが帰ってきた。
「ただいま、あかね」
「おかえりなさい」

「あら？このいい匂いは・・・もしかして、夕ご飯作っていたの？」
「うん、炒飯を今、作った所だよ」
「あら、じゃあ私もいただこうかしら？」
「うん、いいよ？食べてみて？」
そう言って、俺は文香さんにも、作りたての炒飯を出した。
「じゃあ、頂きます」
「頂きます」
そう言って、二人で炒飯を食べる。
うん、なかなか美味い、文香さんはどう言った反応するのか、ちょっと気になってしまった。
「ど、どう？」
「うん・・・・まあまあね、ちょっと調味料のバランスが悪いけど、まあいけるわよ？」
「よかった」
「でも、もうちょっと工夫すると美味しくなると思うわ、そこの所は頑張って見なさいね？」
「あ、うん、そうしてみるよ」
そんな会話をしながら、食べ終わって、休憩していると
「あかね、お風呂沸いたから、入ってきなさい」
「は～い」
文香さんがそう言ったので、浴室に向かう事にした
浴室の中に入って、服を脱ぐ。
最初は脱ぐのにちょっと苦労したが、今じゃスムーズに脱ぐ事が出来た。
うん、馴れって恐ろしいな・・・とか、思う。
最初にシャワーを浴びて、石鹸で体を洗っていく。
改めてみてみると、やっぱり自分の体は綺麗だった。肌が全く荒れていないし
まあ貧乳なので、それほど胸が大きくは無いが、足とかが結構綺麗だった。

全身を洗って、最後にシャンプーで頭を洗い、浴槽に入る。
温度がいい感じに設定されて、あまりにも気持ちがいいので
口笛を口ずさみながら長湯をしてしまった。
風呂から出て、用意された服に着替える。
用意された服は、緑色の下着に緑色のパジャマだった。
うん、この家に一体何色の下着とパジャマがあるんだ？とか思って
しまったが
深く考えないようにして、用意された服に着替える。
そして自分の部屋に戻り、ノートを開いて、こう記した
「今日の出来事、主人公との接点無し、笹村理恵子と遊びに行く」
と、書いた。
そして、ベットに入り、眠くなって来たので、そのまま寝る事にし
た。
こうして、一日が終了したのである・・・

～第十五話～三日目～夜～（後書き）

アクセス数凄いですね～ホント
感想くれたりすると、作者のやる気があがったり致します。
これからもこの物語を、よろしくお願いします。

～第十六話～四日目～朝～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第十六話～四日目～朝～

ジリリリリと鳴って、目が覚める。
気がつくと、昨日と同じ天井だった。
俺は、ベットから降りて、日付と時間を確認する事にした。
日付は七月四日の木曜日となっていて、時刻は七時となっている。
ゲーム「ラブチュチュ」で、水無月あかねと主人公のイベントって
何があったかな・・・と思ったが
全く覚えてなかった。
ま、何とかなるだろ・・・と思い、着ている緑のパジャマを脱いで、
下着姿になる。
下着もパジャマと同じ緑色で、ちょっと色っぽいデザインでもあっ
た。
もうこの姿になっても、全く興奮しないな・・・まあ、自分の体だ
し・・・
と言うか、男に戻って、ちゃんと女に欲情するのだろ～か・・・と
も不安になってしまった。
とりあえず、深く考えない事にして、学校の制服に着替える。
着替えてから、鏡面台で身だしなみをチェックして、自分の部屋か
ら出て、リビングに向かった。
リビングに向かうと、朝食をテーブルに並べている、エプロン姿の
水無月あかねの母親
水無月文香さんがいた。
「あら、あかね、おはよう」
「おはよう」
「今日も起きれたのね」
「うん、時間通りにおきれたよ」
「そう、朝食出来てるから、食べなさい？」
「は～い」

そう言って席に着く。
今日の朝食は、コーンフレークに野菜炒めだった。
コーンフレークと野菜炒めを食べていると、文香さんが話しかけてきた。
「あら、あかね？」
「何？」
「ミニトマト食べられるようになったの？いつもは、出しても残してるのに」
「う、うん、好き嫌い無くなったんだ」
そうか・・・水無月あかねって、ミニトマトが嫌いだったのか・・・
それは、知らなかったな
まあ、今更食べても別に問題はないと思うので、そのまま食べ続ける事にした。
「まあ、好き嫌いが無くなる事はいい事だわ」
「う、うん、そうだよね」
そう言いながら、食べ終わって、自分の部屋に戻り、鞄を持って、出かけようとすると
文香さんがこう言って来た。
「あ、あかね、これ、持って行きなさい」
そう言って、俺に渡してきたのは、青色のスモールバックだった。
「これは？」
「これはって・・・今日、必要な物が入ってるの、忘れちゃったの？あかね？」
「え、あ、うん、ちょっと忘れちゃってた、ありがとう」
「それと、昨日は遅かったけど、今日はちゃんと家にいるから、夕飯期待しててね？」
「あ、うん、分かった、じゃあ、行って来ます」
そう言って、俺はスモールバックを受け取って、外に出た。
今日必要な物？一体何だろ～な・・・と思って、スモールバックの中を見てみると

そこに入っていたのは、紺色のスクール水着だった。
と、言う事は・・・今日、プールの授業があるって事か・・・
と言うか・・・これ、サイズ合ってるのか？とか思ったが
遅刻するのも何なんで、その時考えればいいか・・・と思い、学校
に向かう事にしたのであった・・・

～第十六話～四日目～朝～（後書き）

アクセス数が本当に凄いですね
毎日二百人以上に読まれていますし
読んで下さって、真にありがとうございます～

～第十七話～四日目～午前～プ～ル～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第十七話～四日目～午前～プ～ル～

青色のスモールバックを持って、俺は、学校の中へと入る事にした。
自分のクラスの一年四組の中に入り、自分の席に着いて、鞄とスモールバックを机に置く。
鞄から教科書やノートを机の中に入れて、授業が始まるのを待つ事にした。
そして、キーンコーンとチャイムが鳴って、授業が始まる。
授業内容は、難しい問題とか全く出なく、先生に当てられもしないので、比較的簡単に終わった。
授業が終わって、クラスメイトが荷物を持って、移動しているので、もしや・・・
プールの授業か？と思い、俺もスモールバックを持って、クラスメイトについて行く事にした。
たどり着いた場所は、外の建物で、部屋名に「女子更衣室」と書かれている。
入るのがちょっと躊躇ったが、俺も一応女なので、勇気を出して入る事にした。
中は下着姿の生徒と水着に着替え終わっている生徒がいる。
この状況って、男だと天国じゃないか？とか思うのだが、まあ、俺も同じ同姓なので
あいているスペースを探して、着替える事にした
まず着ている制服を脱いで、下着姿になると、俺に話しかけて来る者がいた。
「あ、あかね～？なかなかいい下着着てるね？」
そう言って来たのは、青色の下着姿の笹村理恵子である。
うん、マジマジと見てみると、やはり胸が大きい、軽くD以上あるんじゃないか？と思われる。
「そ、そう？」

「うんうん、まああかね、胸小さいよね？いいなあ・・・私なんて、大きいから肩こっちゃってさ？ちょっと揉んでくれない？」
「え～っと・・・揉めばいいの？」
そう言って、俺は理恵子の肩を揉む。
な、なんだ？この感じは・・・真正面で揉んでるので、胸の谷間が丸見えだった。
なんかすげえいい匂いもするのだが・・・
「あ・・・あん・・・、そ、そこ～気持ちいいわ～」
「ちょ、ちょっと変な声出さないでよ」
「だって、ほんとに気持ちいいんだもん、そうだ、私も胸が大きくなるように揉んであげよっか？えい」
そう言って、理恵子が胸を揉んで来た。
「ちょ・・・あ・・・」
「おやおや～？もしかして、感じちゃったとか～？」
「な、何言ってるの！そ、そんな訳・・・」
「と言ってるけど、顔が赤いわよ～？そうか～私のテクで感じましたか～、私もいい腕してるわね～」
「か、感じてなんか・・・ひゃ・・・」
「体は正直よの～っふっふっふ」
なんか理恵子の目が怪しく光ってるんだが・・・
そんな感じが五分ぐらい続いて、気がつくと、俺と理恵子の二人しかいなかった。
「ね、ねえ、理恵子、遅れると不味いんじゃない？」
「あら、そうね～というかあかね？水着に着替えてないじゃん？」
「理恵子が胸揉んで来たからでしょ！」
俺は、そう言って素早く、紺色の水着に着替えた。
理恵子も水着に着替える。
理恵子と比べると、明らかに胸の大きさが違った。
やっぱり理恵子って、スタイルいいな・・・とか思う。
「じゃあ、行きましょう」

「うん」
そう言って、女子更衣室を出て、プールサイドに向かう。
プールの広さは、２５Ｍプールだった。
最初に準備運動をして、そしてプールの中に入る。
プールの中は、水温がちょっと冷たく
まあ日差しがかんかんに照り付けているので、結構気持ちがよかった。
気ままに泳いでいると、理恵子が話しかけて来る。
「あかね～２５Ｍ競争しよ～」
「いいよ」
「ちなみにあかね？平泳ぎとクロールどっちで勝負する？」
「じゃあ、クロールで」
「了解、じゃあ行くわよ」
そう言って、スタート位置に並ぶ。
俺が一コースで、理恵子が２コースだった。
「じゃあ、よ～い・・・・・ドン！」
そう言って、俺と理恵子は、プールに飛び込む。
結果はどうなったのかと言うと
数秒の差で、負けた。
「あかね・・・やるわね・・・まあ、私が何とか勝ったけど・・・」
「理恵子こそ、泳ぎ上手じゃない？水泳部とかに入ったら？」
「いいよ、私、自由でいたいしね～」
「ふ～ん」
そう言ってから、しばらくプールの中で遊んでいると、キーンコーンと鳴ったので
プールから出て、女子更衣室に向かった。
水着をスモールバックに入れて、制服に着替える。
着替え終わって、教室に戻ると、異様に眠くなった。
次の授業もあるのだが、眠気には勝てず、そのまま俺の意識は、途切れたのであった・・・

～第十七話～四日目～午前～プ～ル～（後書き）

この物語を読んで下さって、ありがとうございます。
ちなみに自分はここ五年間
プールや海で泳ぐとか経験しておりません。
学生時代のプール授業が最後かな・・・とかだったりします。

～第十八話～四日目～昼～高村菫と遭遇～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第十八話～四日目～昼～高村董と遭遇～

気がつくと、お昼の時間になっていた。
うん、一時間以上寝たって感じがする。
というか、誰も起こしてくれなかったんだな・・・
昼になったので、今日も学食に行く事にして、教室を出る。
教室を出てから、学食に向かうと、人が多くいて、混雑していた。
俺も、券売機の前に並んでいるので、並ぶ事にした。
数分後、やっと俺の番になり、何しようかと考えて、カレーライスにした。
食券が直ぐに出て、カウンターに食券を出してから、数十秒でカレーライスが出てくる。
うん、早いな・・・ほんと・・・
俺はそう思いながら、空いている席を見つけたので、そこに座る事にした。
俺がカレーライスを食べていると、俺に話しかけてくるのがいた。
「あ、あかねちゃん、こんな所にいたんだ？探したよ」
そう言ってきたのは、主人公の初崎孝之だった。
うん・・・探していたと言う事は・・・嫌な予感がヒシヒシと感じるのだが・・・
「えっと・・・先輩、私に何か？」
「実はね？今日、流星群が見えるらしいから、一緒に見ようね？時間は、夜の８時に学校に集合って事で」
なんか、行く事が決定済みで話されている。
これを断ったら、前見たいにループするのか？とか思ったので内心嫌と思いながら、作り笑顔でこう言った。
「あ、はい、分かりました、学校で待ち合わせですね？」
「うん、じゃあ待ってるから」
そう言って、主人公はいなくなる。

どうやら主人公とのラブイベントは「主人公と流星群を見る」と言う事らしい。
このラブイベントを回避する事は出来ないので、どうするかだが・・・
・
そうだ、他の攻略対象キャラを誘う方針で動こうと思った。
そうしたら、主人公とのラブラブフラグを回避できるんじゃないか？と思ったので
誰から誘うか・・・と悩み、まあ攻略対象キャラがいそうな場所から探していく事に決めて
カレーライスを食べ終わる。
時間が余ったので、他の攻略対象キャラを探しに行く事にしたのであった。
まず何所から行くかよ迷って、屋上に行く事にした。
屋上に出ると、外は日差しが強く、結構暑く感じられて
数人の生徒がお弁当を食べていたりしている。
その中に目標となる人物を見つけたので、声をかけてみた。
「高村先輩、こんにちはです」
俺が、声をかけたのは、三年生の高村菫であった。
高村菫も攻略対象キャラの一人で、銀色の髪の色をしている。
「あら、貴方は・・・確か、水無月さんでしたっけ？」
「はい、一年の水無月あかねです、実は高村先輩に言いたい事があって、来ました」
「私に言いたい事？それは何？」
「実は・・・今日、孝之先輩に星を見ないかって、誘われてるんです、私一人だけと言うのも嫌なので、高村先輩に声をかけたんです、今日、先輩って予定ありますか？」
「私・・・・？そうね・・・今日は、何も予定ないわね・・・孝之に誘われてるのね？」
「はい、先輩もどうですか？」
「・・・・分かったわ、私も行く事にするわ」

「ありがとうございます！じゃあ、時間は夜の八時に、学校の前で待ち合わせです」
「了解」
「じゃあ、私は行きますね」
そう言って、俺は、屋上から出て行く。
うん、次はどうしようか・・・と思っていると、キーンコーンと鳴ったので
仕方がないので、自分のクラスに戻る事にした。
次は、放課後にでも、攻略対象キャラを探そうかな・・・と、思ったのである・・・

～第十八話～四日目～昼～高村董と遭遇～（後書き）

この物語も結構進みましたね～
まあ、まだまだ進みますが
これからもよろしくおねがいします
ちなみにイラストですが、一応描いてみました。
けど、載せられない・・・時間が無さすぎて・・・
途中までしか出来てないです。
なので、載せないと思います。
出来れば誰かに描いてほしいって感じですかねえ・・・

～第十九話～四日目～午後、風見理子＆西村舞と遭遇～（前書き）

はい、零堵です
続きの話です。

～第十九話～四日目～午後、風見理子&西村舞と遭遇～

午後の授業も何なく終わり、放課後。
俺は早速、攻略対象キャラを探しに行く事にした。
まず最初に向かったのは、図書室に行く事にして、図書室に向かう。
図書室にたどり着いて、中に入って、目標の人物を探してみると
本を読んでいる風見理子を見つけたので、声をかける事にした。
「風見先輩、こんにちは」
「・・・・」
ん？反応が無いな・・・？
もう一回、声をかけてみる。
「風見先輩？」
「・・・・」
また、反応が無かった。
なんか凄い集中力で本を読んでいるみたいである。
どうやったら気がつくかな・・・と思い、一回やって見たい事があったので
それを実行する事にした。
「風見先輩～」
そう言って、耳たぶを甘噛みしてみる。
「っきゃ！・・・・い、いきなり何するんですか！？」
「だって、反応が無かったですし、今の声、ちょっとかわいかったですよ？先輩」
「は、恥ずかしい・・・え、ええと・・・あかねちゃんだったよね？」
「はい、水無月あかねです」
「一体私に何の用・・・？」
「実は、先輩に聞きたい事があって」
「聞きたい事？」

「先輩胸のサイズ大きいですよね？少なくとも私よりはありますし？どのぐらいあります？」
「い、言えないわよ！と、と言うか・・・なんて事聞いてくるの！？」
「冗談ですよ、で、ほんとの聞きたい事は、実は孝之先輩に誘われていて、で、私だけと言うのも嫌なので、風見先輩に声をかけたんです、先輩、今日ってお暇ですか？」
「今日・・・・？今日は・・・御免なさい、本を読み終わったら、行く所があって暇じゃないの」
「そうなんですか・・・がっかりです」
「え・・・な、なんでがっかり？」
「孝之先輩との事を私、手助けしようと思ってましたから」
「そ、そんな事をして貰わなくても・・・じ、自分で何とかしてみるよ・・・・？」
「そうですか？じゃあ、いっぱい先輩に声かけて下さいね？あ、用件はこれだけなので、私は行きますね」
そう言って、俺は図書室から出て行く。
そうか・・・風見理子は、参加出来ないのか・・・
じゃあ、次の攻略対象キャラを探す事にして、向かった先は校庭に行く事にした。
校庭に向かうと、陸上部が練習をしている。
その練習している生徒の中に、攻略対象キャラがいたので、練習が終わるのも待つ事にした。
数十分が過ぎて、練習が終わったみたいなので、声をかけてみる。
「舞先輩、こんにちはです」
俺が声をかけたのは、二年の西村舞であった。
「あら、あかねちゃん、こんにちは、一体どうしたの？」
「実はですね？私、今日、孝之先輩にデートに誘われたんです」
「デ、デート！？孝之の奴・・・私に内緒でそんな事言ってたのね！」

「で、私、先輩と二人っきりになるのって嫌なので、舞先輩に声かけたんです、舞先輩、来てくれますか？」
「行くわよ、何よ・・・私が今日、誘ったのに断った理由ってこれだったのね・・・？孝之の奴・・・」
おお？なんか黒いオーラがありそうな雰囲気なのだが・・・
なんか・・・怖い感じがするな・・・
「じゃ、じゃあ、ＯＫですか？」
「ＯＫよ、で、場所は？」
「八時に学校の前で集合って言ってました」
「そう、あかねちゃん、教えてくれてありがとね？」
「い、いえ、私より先輩の方がお似合いと思ったので、じゃあ、私はこれで」
そう言って、俺は移動した。
あともう一人は、沖島ユウだが、探しても全く見つからなかったので諦める事にして、俺は家に一度、戻る事に決めたのであった・・・

～第十九話～四日目～午後、風見理子&西村舞と遭遇～（後書き）

アクセス数が本当に凄いですね。
これからもこの物語をよろしくお願いします。

～第二十話～四日目～夜～流星群～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二十話～四日目～夜～流星群～

まず、家に戻って、制服を脱ぐ事にした。
水無月あかねの家に戻ると、母親の水無月文香さんが、出迎えてくれた。
「あら、あかね？今日は早いのね？」
「うん、でも、また出かけなくちゃいけなくなったの」
「出かける？一体何所に？」
「先輩に誘われて、星を見に行く事になったから、じゃあ、着替えてくるよ」
そう言って、あかねの自室に向かう。
部屋の中にたどり着いて、制服を脱いだ。
緑色の下着姿になり、箪笥を調べて、何を着ていこうかな・・・と、悩んだ末
青色のサマーセーターと黄色の長ズボンを着る事にした。
着替え終わって、鏡面台で身だしなみを整えて、文香さんにこう言う。
「じゃあ、行って来ます」
「あ、あかね？何時に帰るの？」
「う～ん・・・今の所、分からないかな・・・まあ先輩と一緒だし」
「そう、あんまり遅くならないようにね？一応女の子なんだし」
「は～い」
そう言って、俺は、家を出る。
外はもう真っ暗で、町中を街灯が照らしていた。
俺は、学校に向かう道を、歩いていく。
数十分歩いて、学校にたどり着いた
校門が、もう閉まっていて正門から入るのは、無理そうだな・・・
と思ったのである。
街頭の時計で時刻を確認してみると、夜の７時５０分となっていた。

うん・・・ちょっと、早く来すぎたかな・・・とか思っていると
高村菫がやって来た。
「こんばんは、あかねさん」
「こんばんはです、高村先輩」
「あかねさん、早いのね？一番乗りみたいだし」
「たまたまですよ、時間を気にせず来たら、こんな早くなったんです」
「そう」
そんな感じに話していると、主人公と西村舞がやって来た。
「あかねちゃん・・・・舞と菫先輩に声かけたの？」
「はい、何かまずかったですか？」
「い、いや・・・せっかく二人っきりで星を見ようと思ってたのに・・・」
それが嫌だったから、二人を呼んだんだよ
「あかねちゃん、教えてくれてありがとね？ほら、孝之、行くわよ」
「お、おい引っ張るなって」
「ところで、行くって何所へですか？」
「せっかく学校に来たんだし、屋上にでも行きましょうか？確か、裏門から校舎の中に入れるはずよ」
「高村先輩・・・・詳しいですね」
「まあ、結構、裏門を使用していたしね」
高村菫がそう言ったので、俺たち四人は、裏門から校舎の中に入る事にした
校舎はちゃんと鍵が施錠してあったのだが、高村菫がピッキングで簡単に開けてしまう
これって犯罪じゃないのか？とか思ったが、まあ深く考えない事にして
校舎内に入り、屋上を目指す。
屋上に辿り着くと、夜空が綺麗だった。
雲が全く出ていなく、満月がくっきりと見え、星も肉眼で確認出来

るほど、外が快晴であった。
「綺麗～」
「ああ、ほんとだな、あの、いい加減腕を離してくれないですかね？舞」
「嫌よ、離したら、墨先輩やあかねちゃんに何するか分からないし」
「そ、そんな事・・・」
おいおい、もしかして二人きりだったら、何かするつもりだったのか？
ふ～・・・西村舞を呼んでおいて、正解だったな・・・ほんと
「あ、流れ星が出始めたわよ」
そう高村菫が言って、空を見上げると
流れ星が無数に広がっていた。
うわ、めちゃめちゃ綺麗だな～と思う。
「綺麗ね～・・・孝之？」
「何だよ・・・」
「今度、二人っきりで見ようね？」
「・・・・・・・・」
「何？私とじゃ見たくないわけ！？」
「痛たたた！腕が～～！！い、嫌な訳ないだろ！！」
「そう？なら、よかった」
うん、主人公・・・いい気味だな・・・とか思った。
流れ星は、三分以上続いて、終了した。
「もう、流れ星は無い見たいね？じゃあ、帰りましょう」
「は～い、賛成です」
「あかねちゃん」
「な、何ですか？先輩」
「今度は、二人きりでどっか行こうね？」
「ちょっと、あかねちゃんに何言ってるのよ、あかねちゃん？断っていいからね？」
「えっと・・・舞先輩が怖いので、了承しかねないです」

「そう・・・でも、俺は諦めないから」
「もう、いいでしょ？帰るわよ、孝之」
「痛たたた、だから腕を引っ張るなって！」
そう言って、二人は、帰って行く。
残された俺と菫はと言うと
「なんか・・・あの二人って結構お似合いよね・・・？」
「はい、私もそう思います」
「じゃあ、私達も帰りましょうか？警備員に見つかると、まずいしね？」
「そうですね、じゃあ、帰りましょう」
そう言って、屋上から出て、外に出る。
外で菫と別れて、家に着くと
夜の九時となっていた。
リビングで文香さんと一緒に、夜ご飯を食べて、自分の部屋に戻る。
自分の部屋に戻って、早速ノートに今日あった出来事を書き込む事にした。
「四日目、主人公に星を見に誘われる、他の攻略キャラを誘う、ラブイベントは回避されたと思う」
こう書いて、ベットに入り、目覚ましをセットして
眠くなったので、瞼を閉じる。
こうして、俺の一日が終わったのである・・・

～第二十話～四日目～夜～流星群～（後書き）

零堵です。
この物語も二十話行きました。
あと、プロローグにイラストを載せました。
イラストの感想とかくれると、うれしいですねえ・・・

～第二十一話～五日目～朝～（前書き）

零堵です。
続きの話です。

～第二十一話～五日目～朝～

ジリリリと音が鳴って、俺は目を覚ます。
起きて、ベットから降りて、日付と時刻を確認する事にした。
日付は七月五日の金曜日となっていて、時刻は目覚ましにセットした時間の
七時となっている。
俺は、今日も学校があるので、着ている服を脱ぐ事にした。
服を脱いで、下着姿になり、制服とスカートを着こなす
うん・・・もう、女物の服を着る事に、全く抵抗する事は無くなったな・・・
こう言うのをなれって言うのか・・・
制服に着替え終わって、鏡面台で、身だしなみをチェックする。
鏡に写っているのは、制服を着た水無月あかねの姿で
全く元の男の姿に戻っては、いなかった。
身だしなみをチェックが終わって、リビングに向かう。
リビングに向かうと、エプロン姿の水無月あかねの母親
水無月文香さんが、朝食をテーブルの上に置く作業をしていた。
「あ、おはよ～あかね、今日も起きれたのね」
「う、うん、目覚ましかけといたし」
「そう、それは良かったわ、あ、朝食出来てるわよ」
「は～い」
そう言って、席に座る。
今日の朝食は、白いご飯に海苔に卵焼きに納豆だった。
思いっきり、和風の朝食である。
俺は、頂きますと言って、朝食を食べる。
朝食を食べていると、文香さんがこう言って来た。
「そう言えば、あかね？」
「何？」

「明日と明後日って、お祭りよ？誰か誘っていくの？」
「う～ん・・・・今の所、そう言う予定はないかな」
「そう？なら、この前電話してきた孝之君だったっけ？その子を誘ってみたら？」
「い、いいよ、孝之先輩ってすごくもてるから、他に相手いると思うし」
「え～？そう？でも、あかね？付き合いたいなら、頑張るのよ？」
別に全く付き合いたいと思っていないのだが・・・
「う・・・うん、努力はしてみる」
そう言っておく事にした。
朝食を食べ終わって、鞄を持ち、家を出る。
夏の日差しがかんかんに照り付けていて、結構暑く感じた。
通学路を歩きながら、考える。
今日のイベントって何かあったかな・・・・と、考えたが
全く思いつかなかった。
まあ、何とかなるだろ～と思い、通学路を歩いていると
前に笹村理恵子を見つけたので、声をかける。
「おはよ～理恵子」
「あら、あかね、今日は早いね～？いつもぎりぎりじゃない？」
「そんな事ないって」
「そう？まあいいけど、それより、あかね？今日って、授業午前中しかないじゃない？」
「え・・・そうだっけ？」
「そうよ？あ、先生がそう言っている時に寝てたわね？全く・・・なんで良く寝るのに、胸育たないのかしらね？やっぱり孝之先輩に揉んでもらうのがいいんじゃない？」
「余計なお世話でしょ、胸の事はいいの」
「ふ～ん、ま、あかねがそう言うならいいけどね」
そんな会話をしながら、学校にたどり着く。
理恵子の話によると、今日は授業は午前中だけらしいので

午後とか何をしたら?とか、考えていたのであった・・・

～第二十一話～五日目～朝～（後書き）

アクセス数一週間連続三百人以上達成～
読んで下さって、ありがとうございます～
もうすぐ、ユニークアクセス数が１万超えますね
まだ連載初めて、１ヶ月もたっていませんのに
これからも、この物語を、よろしくお願いします

～第二十二話～五日目～昼～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二十二話～五日目～昼～

俺は、笹村理恵子と一緒に歩き、学校にたどり着く。
同じクラスなので、同じ教室の中に入り、自分の席に座る。
理恵子から、今日は午前中の授業しか無いと聞いていたので
比較的楽そうだな・・・と思うのであった。
そして、授業が始まった。
授業は、先生に当てられたりもしたが、教科書の文章を読むだけだったので
間違えずにすらすらと読む事に成功
あとは、ぼ～っと授業内容を聞いているだけだった。
すぐに時間が経過して、午前中の授業が全て終わった。
今日は午前中だけの授業なので、学食へは行かないでも別に問題は無いと思う。
帰り支度をして、教室を出て、廊下を歩いていると
「あ、いたいた、あかねちゃん」
俺に、話しかけてきたのは、主人公だった。
っげ、一体俺に何の用なんだ・・・？
「えっと・・・先輩、何の用ですか？」
「実はさ、ここに遊園地のチケット二枚あるんだ、あかねちゃんに一枚あげるから、一緒に行こう？」
そんな事を言ってきた。
ここで、俺が行きませんって言ったら、どうなる？と思い、こう言ってみる。
「行きません、先輩と二人っきりだなんて誰が行くか！ぼけ！」
するとまたまた目の前が真っ暗になり、気がつくと
主人公が目の前にいて、こう言って来る。
「実はさ、ここに遊園地のチケット二枚あるんだ、あかねちゃんに一枚あげるから、一緒に行こう？」

っく・・・これもループするのか・・・
仕方が無いから、こう言う事にした。
「はい・・・わかりました」
「じゃあ、はい、これ、時間は1時に駅前でね？じゃあね」
そう言って、主人公はいなくなる。
手元に残ったのは、遊園地のチケット一枚だけだった。
それを貰って考える。
チケットは二枚と言う事は、他のキャラは誘えないって事だよな・・・
・
と言う事は・・・二人っきりのデートって事で
仲良くなると、キスされちゃったりするのか！？と思ったのである。
これは不味いんじゃないか・・・？と青くなりながら
とりあえず家に戻って、制服を着替える事にした。
水無月あかねの家に戻り、制服を脱いで、服装を選ぶ。
着ていく服はどれにそゆかな・・・と悩み、なるべく可愛くないの
を選ぶ事にした。
地味目の服に、長ズボンを履いて、外に出かけようとすると
水無月文香さんが、こう言って来た。
「あら、あかね？出かけるの？」
「うん、遊園地に行く事になって」
「そうなの？それにしても・・・その格好で行くつもり？」
「そうだけど・・・」
「駄目ね・・・ちょっとこっちに来なさい！」
そう言って、無理矢理、俺の手を捕まれた。
「え、ちょ、ちょっと」
そして、無理矢理着替えさせられた服は、帽子に白のワンピースに
ピンクのスカート姿にされた。
「うん、似合ってるわよ、あかね」
「こ、この服で外歩けと・・・？」
「大丈夫、あかね、可愛いから、ナンパも多いと思うわよ～」

「ナンパされるのは、嫌なんだけど・・・あ、時間きちゃうから、行って来ます・・・」
「行ってらっしゃい～」
そう言って、外に出る。
外に出て、思った事は、とりあえず「主人公との二人っきりになれるアトラクションを乗らない」
と言う方針で、動こうと思ったのであった・・・

～第二十二話～五日目～昼～（後書き）

この物語も結構進みましたね～
読んで下さって、ありがとうございます
感想、くれると作者のやる気があがったり致します

～第二十三話～五日目～遊園地デート～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二十三話～五日目～遊園地デート～

時刻は、昼の一時
俺は、待ち合わせ場所の駅前へと来ていた。
待ち合わせスポットで待っていると、俺に声をかけて来る者がいた。
「か～のじょ、一人？」
「・・・・」
なんだ？こいつは・・・もしかして、俺の事をナンパしているのか？
俺は、とりあえず無視を決め込む事にした。
「彼女、かわいいね～俺と遊びに行かない？」
「行きません、待ち合わせしているので」
「そんなつれない事言うなよ～？ほら、行こうぜ？」
そう言って、腕を掴まれた。
「！離して下さい！」
「ん～怒った顔も可愛い～、お持ち帰りしたいぜ～」
うわ、気持ち悪・・・、これだったらまだ主人公のほうがマシだと思う。
そう思っていると、いきなり男が「ぐえっ」と言って、倒れこむ。
何で倒れたのか、解った。
主人公が後ろから、蹴りを入れたからである。
「あかねちゃん、待たせちゃってごめん、さ、行こうか」
そう言って、男を踏みつける。やる事がえげつないな・・・主人公・・・
「は、はい」
俺は、そう言って、主人公と行く事にした。
電車に乗り、辿り着いた場所は、巨大テーマパークだった。
結構人が多く、並ぶのに時間がかかるんだろ～な・・・と、思ったほどである。
「じゃあ、入ろうか？あかねちゃん」

「あ、はい」
そう言って、テーマパーク内へ入る。
中は見た目通りに結構広く、このテーマパークのイメージキャラクターが、写真を撮られていた。
俺は、まあ興味が無いので、スルーする事に決めてとりあえず楽しむか・・・と思い
主人公にこう言ってみる。
「先輩、私、何か乗りたいです」
「じゃあ、一緒に乗りに行こうか？あかねちゃん、何からチャレンジする？」
「そうですね・・・・」
そう言って、遊園地内を見渡す。
そして、乗ろうと思って決めたのは
「先輩、あれに乗りましょう」
俺が指差したのは、ジェットコースターだった。
あれ、乗ってみたいんだよな・・・と、思ったからである。
「解った、ジェットアローンX（クロス）だね？よし、乗りに行こう」
そんな名前だったのか、あれ・・・
そのジェットアローンXを乗る事に決めて、列に並ぶ。
三十分後に、俺達の番になったので、乗り込む事になった。
ちなみに座席は、運がいいのか悪いのか、一番前の席だった。
「あかねちゃん、怖くない？」
「そういう先輩こそ、怖くないんですか？」
「俺は、大丈夫だよ、こう言うの舞に付き合わされてるからね」
「そうですか」
舞って、西村舞の事だよな・・・
そうか・・・西村舞は、絶叫系好きだったのか
西村舞のあらたな一面が見れたな・・・と思った。
そして、ジェットアローンXがスタートする。
いきなり、機械が上にあがって、すぐに垂直落下をしてループする。

体にかかるGが凄いな・・・と感じながら、四分ぐらいで、終わった。
「結構、楽しかったかな、あかねちゃんは？」
「はい、楽しかったです、ちょっと眼が回りましたけど」
「まあ、あの三回転連続ループは凄いよね・・・」
「はい、確かに凄かったです・・・先輩、他のアトラクションでおすすめのってあります？」
「そうだな・・・ちょっと待って」
そう言って、主人公はいつの間にか用意してあったのか、パンフレットを手にとってみている。
「よし、じゃあこのホラーハウスに行ってみない？」
「ホラーハウスですか？ちょっと楽しそうかもです」
「でしょ？じゃあ、行こうか」
そう言って、ホラーハウスのアトラクションがある場所に向かった。
目的地にたどり着くと、カップルで入る人が沢山いた。
なんか・・・えらく入りづらいんだが・・・
やっぱり断ろうかな～とか、思ってると
「あ、ここは早く入れるね、さあ、入ろう」
そう言って、無理やり手を捕まれて、強引に中に入ってしまった。
ホラーハウスの中は、暗がりの設定のようで、明かりがほとんど無く仕掛けで動くのか、お化けの形をした物が飛び出してきたりした。
うん・・・何というか・・・思った以上に怖くない、まあ中身男だし普通の女の子だったら、ここは悲鳴をあげて、抱きつくとかするのか？とか思ったが
俺は、そんな事は実行しないぞ！と決めているので、主人公に抱きつく行為はしなかった。
ホラーハウスが終わって、次はゴーカートに乗り
メリーゴーランドを乗って、コーヒーカップを乗り終わった頃
空はもう、暗くなっていた。
暗くなったので、俺は、先輩にこう言って見る。

「先輩、そろそろ帰ります」
「え？もう？じゃ、じゃあ最後にひとつだけ乗ったら、帰ろう？」
「は、はあ・・・最後のひとつってなんですか？」
「それは・・・・あれさ」
そう言って指差したのは、巨大な観覧車だった。
あれは、不味い！二人っきりで、密室に閉じ込められるじゃないか！
そう思ったので、俺はこう言う。
「い、嫌です、先輩一人で乗って下さい」
「いいからいいから、さ、行こう～」
そう言って無理やり手をつかんで、強引に乗せられてしまった。
俺は、主人公と向かい合わせに乗っている。
こうなったら、ずっと外を見てやる！って思い、外を見る事にした。
外を見ていると
「あかねちゃん・・・」
「は、はい？」
「その服、かなり可愛いね？あのナンパした男の気持ち、本当によくわかるよ」
「は、はあ・・・ありがとうございます」
「でね・・・あかねちゃんに言いたい事あるんだ、聞いてくれない？」
「言いたい事ですか・・・？」
「うん・・・・俺さ・・・あかねちゃんが好きだ！俺の彼女になってくれ！」
とうとう告白されてしまった！やばい、めちゃめちゃいい顔でこっちを見つめてきてる！
さて・・・冷静になって考える。
ここからどうやってバットエンドを目指せばいいかと
これをＯＫしちゃったら、トゥルーエンド確定で
主人公とのラブイベント満載の未来が待ち構えている訳で・・・
だから、ここは思い切って、こう言ってやる。

「御免なさい、私より、舞先輩とか、先輩の彼女に相応しいと思います」
「そんな事ないよ、あかねちゃん、可愛いし」
可愛いのは自分でもわかってるんだよ、ただお前とは付き合いたくないって事だが
「でも、やっぱり・・・・御免なさい」
「・・・・そう、でも、俺は諦めないからね？俺の事は嫌いじゃないんでしょ？」
「嫌いです」
そう言った瞬間、目の前が真っ暗になり、気がつくと
「・・・・そう、でも、俺は諦めないからね？俺の事は嫌いじゃないんでしょ？」
同じ台詞を言っていた。っく、ここでループが発生するのか・・・
なら、こう言うしか無いじゃないか・・・
「はい、嫌いじゃないです」
「良かった、じゃあ俺、諦めないから」
そう言って、観覧車を降りて、遊園地から出て
先輩と別れて、自分の家へと戻る。
家に戻ると、文香さんが、こう言って来た。
「あかね、お帰りなさい～夕食出来てるわよ」
「あ、うん、じゃあ頂きます」
そう言って、二人で、夕食を食べる。
食べ終わって、浴室に入り、服を脱いで、風呂に入って考える。
主人公に告白されたから、これを回避するには・・・どうすれば・・・と
考えて、決まったのは
「他の攻略対象キャラと主人公をくっ付ける」という事だった。
風呂から出て、用意されていた下着は
白色のレースのついたふりふりの感じのやつと、白色のブラと白色のパジャマだった。

全部白一色だな・・・と思ったが、深く考えない事にして、用意された物を着る。
そして、自分の部屋に戻り、ノートにこう記す。
「五日目、主人公に遊園地デートに誘われる、そこで主人公に告白される、結果は保留状態」
そう書いて、時計を見てみると、結構遅い時間になってたので、寝る事にした
こうして、今日の一日が、終了したのである・・・

～第二十三話～五日目～遊園地デート～（後書き）

今回は、いつもより少し長めに投稿します。
うん、ついに物語も、中身の日にち的に言うとあと二日まで迫ってきました
これからも、この物語をよろしくお願いします。
ユニークアクセス８千人超えました～
もうちょっとで一万人ですねえ

～第二十四話～六日目～朝、笹村理恵子との出会い～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話を、投稿します。

～第二十四話～六日目～朝、笹村理恵子との出会い～

ジリリリと音がして、目が覚める。
目が覚めて、ベットから降りて、日付と時刻を確認する事にした。
日付は、七月六日の土曜日となっていて、時間は目覚ましでセットした時刻
朝の七時となっている。
いつもなら、ここから制服に着替えるのだが
今日は、学校が休みなので、制服に着替える必要は無く
白いパジャマ姿で、リビングに向かう事にした。
リビングに向かうと、朝食を作っている水無月文香がいた。
「あら、あかね、今日は学校無いのに、早く起きたのね？」
「うん、目覚ましをいつもと同じ時間にかけたから」
「そう、それはいい事だわ、あ、もうすぐ朝食出来るから、一緒に食べましょう」
「は～い、あ、手伝うよ」
「ありがとう、あかね」
俺は、文香さんの手伝いをする事にした。
そして、出来た朝食は、トーストにハムエッグ、野菜サラダの洋食な感じの朝食だった。
朝食を文香さんと二人で、食べ終わって、自分の部屋に戻る。
今日は、これから何しよっかな～と思い、今日と明日は、街でお祭りをやっているので
下見も兼ねて、見学する事に決めて、服を着替える事にした。
着てるパジャマを脱いで、下着姿になり、どれを着ようか悩んだ末
動きやすい、白色のTシャツと青色の短パンを履く事にした。
鏡面台で、身だしなみを整えて、外に出る。
外の天気は、物凄い快晴で、こんな天気だと麦わら帽子とかつけてもいいんじゃないか？とか

思うほどである。
俺は、まず何所に行こうかと悩んで、街に向かう事にしたのであった。
家から街まで、数十分歩いて、商店街と思われる場所にたどり着く。
商店街は、お祭りの準備をしているのか、組み立てる前の屋台とかおいてあったり
浴衣を着ている人もちらほら見かけたりした。
浴衣か・・・水無月あかねの家にもあるのか？
いや、あの文香さんの事だから、絶対にあると思われる・・・
そんな事を思いながら、商店街の中を歩いていると
「あ、あかね？」
俺に、話しかけてきたのは、笹村理恵子だった。
笹村理恵子の姿は、ピンクのワンピースに白のスカート姿でかなり可愛い感じに、仕上がっていた。
「あ、理恵子、おはよう」
「こんな所で、何をしてるの？あかね？」
「散歩かな？そういう理恵子は、何してんの？」
「私は、買い物よ、まあ買い終わったから、遊びに行こうかなって、思ってるわけ、あ、そうだ、あかね？暇だったら、遊びに行かない？」
「暇だから、いいよ」
「じゃあ、決まりね？夜は、お祭りだから、夜まで何所に行こうかって事よね～とりあえず、街の中でも見て回りましょうか」
「賛成」
そう言って、二人で、街の中を歩く事にしたのであった・・・

～第二十四話～六日目～朝、笹村理恵子との出会い～（後書き）

零堵です。
ユニークアクセス数九千人超えました～
もうすぐ一万って感じですね～
これからも、この物語をよろしくお願いします。

～第二十五話～六日目～昼、沖島ユウとの出会い～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二十五話～六日目～昼、沖島ユウとの出会い～

俺は、街の中を笹村理恵子と二人で、歩いていた。
「ねえ、あかね？何所に行く？」
「そうだなあ・・・とりあえず、見て回ろうか？」
「そうだね」
そう言って、二人で街の中を歩く。
街は、夜に向けてのお祭りの準備の為か、屋台を製作している人がたくさんいた。
その屋台を作っているのを眺めながら、歩いていると
「あ、あそこにいるの、沖島先輩だ」
「え？沖島先輩って？」
「先輩と同じクラスの人だよ、沖島先輩～」
俺が見つけたのは、街の中を歩いている沖島ユウを見つけたので、声をかけて見る事にした。
「こんにちはです、沖島先輩」
沖島先輩は、帽子にトレーナーに長ズボンという、男の恰好をしていた。
「あ、あかねちゃんと・・・え～っと誰かな？」
「私、笹村理恵子って言います！沖島先輩ですよね？」
「う、うん、そうだけど」
「り、理恵子？どうしたの？」
「私と付き合って下さい！」
理恵子がそう、爆弾発言しました。
ええ～何これ？この状況・・・
ちなみに沖島ユウは、男の恰好をしているが、正真正銘、女の子なのだが
理恵子は、解かってるのか？そこの所
「えええ！？ご、初対面でいきなり？ぼ、僕には好きな人がいるか

ら、ごめん」
「好きな人って誰です？学校の人ですか？」
「う、うん、まあ・・・そんな所かな・・・」
「そうですか・・・残念です」
「じゃ、じゃあ、僕は行く所があるから、行くね？それじゃあ」
そう言って、沖島先輩は、俺達から離れて行く。
俺は、早速理恵子に聞いてみる。
「いきなりどうしたの？理恵子？告白なんて」
「だって、あの沖島先輩って人、物凄いイケメンだったよ！？あかねは、あの人を見て何も感じなかったの？」
「た、確かに・・・かなりの美形だけど・・・（でも女だし）」
「あんなかっこいい先輩が、同じ学校に通っていたなんて知らなかったわ・・・よし」
「ど、どうしたの？」
「私、あの先輩の彼女にしてもらうように頑張ろうっと、あかねも協力してくれない？」
「そ、それはやめた方が・・・」
「何で？あ、もしかして・・・あかねもあの先輩の事が好きだから？」
「そんなんじゃないよ、私は理恵子の為を思って言ってるの」
「ふ～ん？私の為ねえ・・・ま、私は諦めないわ、あかねはさ？」
「何？」
「あの孝之先輩の事が好きなんでしょ？」
「違うよ・・・何言ってるのさ？理恵子・・・」
「え～でも、前にそんな事を言ってたような気もするけどさ～？ま、私は沖島先輩の事を狙うつもりだから、協力してね？」
「はあ・・・」
こりゃ何を言っても無駄だな・・・と思い、諦める事に決めた。
お昼になったので、俺と理恵子はファーストフードのお店に入る事にした。

店内は昼間と言うだけあって、結構混雑して、十分ぐらいかかってやっと注文する事が出来た。
昼飯を食べ終わって、次はゲーセンに行く事にした。
ゲーセンの中に入り、音楽ゲームや対戦型ゲームで遊んで、時間を潰していると
「あ、あかね、屋台とか出来上がったみたいだから、外行こうか？」
「うん、わかった」
そう言って、ゲーセンの外に出て、街の中を見て見る。
人が多く集まっていて、屋台も完成していた。
俺と理恵子は、その中を歩いて、見て見る事に決めたのであった・・・

～第二十五話～六日目～昼、沖島ユウとの出会い～（後書き）

もうすぐこの物語、書き始めて一ヶ月ですね。
この物語を読んで下さり、お気に入り登録をしてくれて、ありがとうございます～

～第二十六話～六日目～夜～お祭り会場にて～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二十六話～六日目～夜～お祭り会場にて～

笹村理恵子と、街の中を歩いて、数時間
時間も結構経過して、夕方になった。
屋台も色々出ていたりしている。
「今年も屋台いっぱいあるね～」
「そうなんだ」
「あかね、どれから食べようか？」
「そうだね・・・」
俺は、どれにしようか悩んだ。
目の前にある屋台は、お好み焼き、焼きそば、たこ焼きの
三種類の店が、屋台として、立ち並んでいる。
「じゃあ、まずたこ焼きから行こうか？」
「賛成、じゃあたこ焼きを買いましょう」
そう言って、たこ焼き屋のおっちゃんにこう言ってみる。
「すいません～たこ焼き二つ下さい～」
「へい、まいど！」
そうおっちゃんが言って、たこ焼きを焼く
たこ焼きはすぐに出来て、おっちゃんが
「君たちかわいいから、こいつはサービスだ！」とか言ってきて
二個多めにくれた。
「なんか、気前のいいおっちゃんだったね」
「確かに・・・、あ、休める場所で食べようか？」
「じゃあ、盆踊り会場に行きましょう、そこなら座席とか用意して
あると思うし」
「了解」
そう言って、盆踊り会場に向かう。
数分歩いて、盆踊り会場にたどり着くと
人が集まっていて、櫓に太鼓が設置してあり、はっぴを着た者が、

曲に合わせて
太鼓を叩き、その周りを浴衣を着た人達が踊っていた。
「あ、あそこがあいてるよ？」
「うん」
俺と理恵子は、あいている座席があったので、そこで休む事にした。
その座席で、たこ焼きを食べながら、休んでいると
「あ、あかねちゃん、こんばんは」
俺に話しかけてきたのは、先輩の西村舞であった。
舞の姿は、髪をポニーテールに束ねていて、赤色の浴衣姿になっている。
「あ、舞先輩、こんばんはです」
「今日は、友達とお祭りに来たの？」
「あ、はい、そんな所です、理恵子、この人が孝之先輩の幼馴染の西村舞先輩だよ」
「あ、始めまして、あかねの親友の笹村理恵子って言います、私も舞先輩って呼びますね」
「いいわよ、ところでさ・・・・」
「何ですか？」
「孝之見なかった？私、孝之と一緒にお祭り行こう？って誘いに行ったのに、家にいなかったからさ？一人でこのお祭り会場に来てるか、他の女と一緒に来てるかもって思って、私も来たんだけど・・・孝之知らないかな？」
「孝之先輩ですか？私は、見てないですけど・・・理恵子は？」
「私も見ていませんよ？多分、このお祭り会場にはいると思いますが？」
「そう・・・まあ、また探してみるね？それじゃあ」
そう言って、西村舞は俺達から、離れて行った。
「あの感じを見てると、孝之先輩の事好きそうだよね・・・・これは、あかねにライバル登場って感じかな？」
そんなんじゃ無いと思うんだが・・・

たこ焼きを食べ終わって、また移動する事にした。
太陽が沈んで、夜に突入し、人の数もかなり多くなってきて、通路に人が大勢いるので
理恵子と離れそうになったが、何とか離れる事は無く、移動する事が出来た。
移動していると
「あかね？私、そろそろ帰るよ、ちょっと遅くなったし」
「そう？じゃあ、私も帰ろうかな、まあ、明日もお祭りあるんでしょ？」
「そうだよ、あ、明日はさ？あかね、先輩と来たら？私も、沖島先輩を探してみようと思うし」
「か、考えとくよ・・・」
そう言って、理恵子と別れて、家に戻る事にした。
家に戻ると、母親の水無月文香さんが、こう言って来た。
「あ、あかね、お帰りなさい、そうそう、電話あったわよ？」
「電話？」
「また、孝之君からよ「あかねちゃん、一緒にお祭り行こうよ？」ですって、あかねはいませんって言ったら、「じゃあ、また明日も誘います」って言って切れたわ、あかね？今日は誰と行ってたの？」
「今日は、理恵子と二人でお祭りに行ってたんだけど」
「そう、また明日もかけてくるみたいだから、これであかねもついに彼氏持ちって感じなのかな？これは、お祝いしなくちゃかも？」
「し、しなくていいよ～、彼氏とか作るとかしないと思うし」
「そう？まあ、いいけど、あ、お風呂沸いてるから、入っていらっしゃい」
「は～い」
そう言って、浴室に向かう。
脱衣所で、服を全て脱いで、裸になり、最初にシャワーを浴びる事にした。
うん、なんかちょっと疲れていたから、シャワーがかなり気持ちいい

体を石鹸で荒い、最後に頭を洗って、湯船に漬かる。
温度もいい感じに設定されており、つい口笛とか吹いてしまい
長めのお風呂タイムとなってしまった。
脱衣所に用意してあったのは、目茶目茶セクシーな黒のブラと黒の
下着だった。
これを着るのか・・・？とか思いっきり悩んだが、ま、一度は経験
？もいいかもと思って、着てみる。
そして鏡に写った姿は、かなり色っぽい。
よく、文香さんがこんな下着持ってたな・・・とか、思ってしまっ
た。
白色のパジャマを着て、今日は食べたので、夕飯はいらず
自分の部屋に戻って、ノートにこう記す。
「六日目、理恵子とお祭りに行き、西村舞と遭遇、主人公との接点
無し、しかし明日、誘いにやって来る」
そうノートに記し、ベットに潜りながら考える。
明日がゲーム上の時間の最終日で、この日に全てが決まるんじゃな
いかと思われる。
この世界に来て思ったんだが、元の世界とあまり変わってなく、別
にこのままでもいいんじゃないか？とか少しぐらい思ってしまうの
も事実だった。女の体にも慣れてしまったし。
まあ、主人公との恋愛は全くと言っていいほど、興味は無かった。
そんな事を考えながら、眠くなってきたので、そのまま寝る事にし
たのであった・・・

～第二十六話～六日目～夜～お祭り会場にて～（後書き）

ユニークアクセス数、一万人突破！
ありがとうございます～まだ連載初めて一ヶ月もたっていないのに
かなり早いですね～
次で話の展開上、最終日ですが、その後をどうするかは
まだ決めていなかったりします
これからも、この物語をよろしくお願いします。

～第二十七話～七日目～朝、主人公と遭遇～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二十七話～七日目～朝、主人公と遭遇～

ジリリリリとなったので、目が覚める。
ベットから降りて、日付と時刻を確認する事にした。
日付は、七月七日の日曜日となっていて、時刻は八時となっていた。
今日は、日曜日なので、学校に行く事はないので、制服に着替える事は無かった。
パジャマ姿で、そのまま部屋を出て、リビングに向かう。
リビングに向かうと、エプロン姿の水無月文香さんが、朝食を作っていた。
「あら、おはよう、あかね」
「おはよう」
「今日も休日だって言うのに、起きるの早いわね、あ、もしかして・・・」
「な、何？」
「昨日かかってきた孝之君の事で早く起きたのかな？」
「ち、違うよ、たまたま目覚ましが鳴って、起きただけだって」
「そう？まあいいけど・・・あ、そろそろ朝食できるわよ？パジャマ姿でいないで、着替えなさい」
「は～い」
そう言って、自分の部屋に戻る。
部屋に戻り、白いパジャマを脱いで、下着姿になり
箪笥から服を選ぶ。
何にしようかと考えて、サマーTシャツと白のスカートを履く事にした。
着替え終わって、リビングに戻る。
リビングに戻ると、朝食ができていた。
今日の朝食は、トンカツ定食みたいな感じで、結構なボリュームがあり

ものすごくおいしそうだった。
「あ、あかね、着替えてきたのね？じゃあ、頂きましょう」
「うん、頂きます」
そう言って、朝食を取る。
うん、マジで美味い、料理上手だな・・・と、物凄く感心してしまった。
あっという間に食べ終わって、自分の部屋に戻る。
これから何をしようか・・・と考えて、部屋の中をチェックする事にした。
部屋の中にあるのは、ベットと机、それに鏡面台に箪笥があり
箪笥の上にぬいぐるみがあったりしている。
机の中を覗いて見ると、鉛筆やメモ用紙、あとアクセサリーが入っていた。
アクセサリーの形が、ハートの形だったので、えらくかわいい趣味だな・・・とか思ってしまった。
そして鏡面台の上にブラシとヘアバンドが置いてあったので
ヘアバンドを頭に装着してみて、鏡を見てみる。
そこに写っていたのは、ヘアバンドをつけた水無月あかねの姿で
かなりかわいく見えている。やっぱり美少女だよな・・・と、思ってしまった。
そんな感じな事をしていると、文香さんが部屋の外から、こう言って来た。
「あかね～？ちょっと来てくれる？」
「な～に？」
そう言って、部屋を出て、文香さんの所に行く。
文香さんは、別の部屋の中にいて、手に何か持っていた。
「あかね、これ、着てくれないかしら？」
「これって？」
「これは、浴衣よ？今日、お祭りでしょ？この浴衣があかねに似合うと思って、探してたのよ？じゃあ、着てくれる？」

「・・・・う、うん」
文香さんがそう言ったので、断ると怪しまれるので、仕方がなく浴衣を着る事にした。
着ている服を脱ぎ、下着姿を文香さんに見られる。うわ、なんか恥ずかしいな・・・
下着の色が黒なので、余計に恥ずかしく感じてしまった。
文香さんが浴衣の着付けが出来るみたいで、素早く浴衣の帯を結んでくれた。
「あら、とってもお似合いよ？あかね」
「ありがとう・・・」
出来上がったのは、黄色い浴衣姿の俺だった。
そうか、水無月あかねって、黄色ってイメージなのか・・・
浴衣に着替え終わって、これからどうしようかと悩んでいるとピンポーンと鳴ったので、外に出てみる。
外に立っていたのは、主人公の初崎孝之だった。
そうか・・・予告どおりに誘いに来たって感じだな？
「おはよう、あかねちゃん、あ、その着物、もしかして俺のために？」
「そんな訳じゃないです！」
「そう？でも、よく似合ってるよ、じゃあ、行こうか？」
なんか、行く事がもう決定済みらしかった。
ここで、断ったら、またループが発生すると思われるので、不本意だが、俺は、こう言う。
「・・・・はい、行きましょう」
「よし、じゃあ、出発～」
そう言って、手を握って来て、手を繋ぎながら、町の中へと向かったのであった・・・

～第二十七話～七日目～朝、主人公と遭遇～（後書き）

いよいよクライマックスって、感じですかね？
明日は、クリスマス・イブ
ま、自分にとっては、まったく関係ありませんけど
とりあえず、一足早く、メリークリスマス～
これからも、この物語をよろしくです
感想くれると、作者のやる気があがったり致します。

～第二十八話～七日目～昼、西村舞と三角関係～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二十八話～七日目～昼、西村舞と三角関係～

俺は、朝に主人公が迎えに来たので、主人公と一緒に出かける事になった。
町の中を手を繋いで歩く。この姿を他人から見たら、思いっきりデートって感じじゃあないのか？
しかも、俺は、母親の文香さんに浴衣を着せられたので、浴衣姿だし・・・
とりあえず、俺は、主人公にこう言ってみる。
「あの・・・手を離してくれません？」
「なんで？」
「なんでって・・・恥ずかしいですし」
「俺は、そうでもないよ？あかねちゃんと手を繋いでいたいしね」
「は、はあ・・・」
こりゃ、何を言っても無駄だな・・・と、思ってしまった。
町の中を歩いて、お祭り会場に辿り着く。
時間がお昼ぐらいなので、人もそんなに多くなく、けど、屋台はもうすでにやっていた。
「あかねちゃん、何から食べようか？」
主人公がそう言って来たので、俺は、冷たい物が食べたくなったので、こう言ってみた。
「じゃあ、カキ氷が食べたいです」
「かき氷だね、じゃあ探してみよう」
そういって、カキ氷の屋台を探す。
屋台は、早く見つかり置いてある商品は
イチゴ味、メロン味、レモン味、宇治金時味、サイダー味の五種類だった。
「どれにする？あかねちゃん」
「え～っと・・・じゃあ、メロンでお願いします」

「メロンだね、すいません、メロンとイチゴを下さい」
主人公がそう言うと、屋台のおばちゃんが「はいよ！」と言って、メロンとイチゴ味を出してくれた。
カキ氷を受け取ると、屋台のおばちゃんがこう言って来る。
「君たちカップルかい？若いっていいわね～」
「はい！カップルというか、妻にしたいです」
おい！いきなり爆弾発言しなかったか？こいつ！？
「そうかいそうかい、二人ともお似合いよ？末永く仲良くね」
お似合いって言うなあああ！！
屋台のおばちゃんの言葉にすっかりと、動揺してしまった俺がいた・・・
「じゃあ、あかねちゃん、食べよっか？」
「は、はい・・・あの・・・さっきの言葉って・・・ほ、本気ですか？」
「え？もちろん本気だけど？」
最悪だ・・・真顔でそう言っているので、とてもじゃないけど嘘をついている感じが全くしなかった。
「子供はそうだなあ・・・二人ぐらいはほしいな、男の子と女の子の両方がいいかも・・・」
そんな事をブツブツ言っている。不味い・・・非常に不味い・・・
奴は本気みたいだ・・・これを了承しちゃったら
主人公と性行為をやる羽目になる訳で・・・そうなったら、俺が子供を生む羽目になるって感じだし
なんとしてもバットエンドにならないと！！
でもどうやったら、バットエンドになるんだ・・・？と、考えていると
「あれ？あかねちゃん、食べないの？かき氷、溶けて来てるよ？」
「あ、はい、ちょっと考え事してて・・・」
そう言って、俺はカキ氷を食べる。
冷たいカキ氷は、結構美味しく、頭が少しキーンとなった。

カキ氷を食べ終わり、二人で屋台を見て回っていると
「あ～！孝之！見つけた！」
そこに現れたのは、孝之の幼馴染の西村舞先輩だった。
これはもしかして、バットエンドに出来るチャンスか！？と思い、早速俺は西村先輩に声をかける。
「西村先輩、こんにちはです、私、孝之先輩に誘われてここに来たんです、丁度いいですから、一緒に見て回りませんか？」
「あ、あかねちゃん？二人で来てるのに？何で舞を誘うの？」
「駄目ですか・・・・？」
俺は、主人公に向かって、泣きそうな顔（もちろん演技）をしたら、主人公はうろたえて
「わ、解ったよ、あかねちゃんがそう言うなら・・・」
「ありがとうございます！先輩！」
「孝之～？何で、あかねちゃんと手を繋いでるの～？私も、手を繋いでもいいよね～？」
そういって、西村舞は主人公の手を繋ぐ。
右手が俺で、左手が舞先輩と繋いでいた。うん、何だこの状況・・・？
ま、これで何とか二人っきりなる事はないので、俺はこう決める。
「主人公と西村舞をくっつけよう」と思ったのである。
これが成功したら、バットエンド確定となるので
俺は、頑張る事にしたのであった・・・

～第二十八話～七日目～昼、西村舞と三角関係～（後書き）

今日がクリスマス～メリークリスマスです。
あと、明日で連載初めて一ヶ月ですね。
それとあと二話か、次でラストとなるって感じかもです。
お気に入り登録してくださって、ありがとうございました。
気が付いたら、攻略されそうです・・・の番外編
気が付いたら、攻略されそうです・・・キャラ変更編も、よろしくお願いします～

～第二十九話～七日目～ＢＡＤＥＮＤ～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二十九話～七日目～ＢＡＤＥＮＤ～

お祭り会場には、俺と主人公と舞先輩と、手を繋いで歩く羽目になった。
うん・・・何なんだろ？この状況・・・
とりあえず、主人公の顔をうかがってみると、なんかニヤケていた。
まあ、こんな美少女二人と手を繋いで、歩いているのだからそう思うのも、無理がないと思われる。
ちなみに俺の服装が、黄色の浴衣姿で、舞先輩は赤い着物を着ていたりしている。
胸のサイズが俺と違うので、舞先輩が歩くたびに胸が揺れているのでまわりから見てみれば、貧乳と巨乳の美少女二人が
男と手を繋いで三人で歩いている状態になっていた。
まわりの男の視線が、物凄く睨まれている感じがするのは、気のせいか・・・？
屋台が出ているので、見回っていると
「あかねちゃん、何を食べる？」
主人公がそう聞いてきたので、俺はと言うと
「じゃあ、焼きそばが食べたいです」
「焼きそばだね？じゃあ、買ってくるよ」
「あ、私も行くわ」
「いいよ、舞とあかねちゃんは、そこで待っていて？」
そう言って、主人公は俺達から離れて、行ってしまった。
ここはチャンスか？と思い、舞先輩に話しかけてみる。
「舞先輩、ちょっと話したい事があるんです、いいですか？」
「私も話したい事があったのよ、丁度いいわね？あかねちゃん・・・」
舞先輩が話したい事？一体何なんだ？
「舞先輩が話したい事って、なんですか？」

「とっても重要な事なんだけど・・・孝之の事、好き？」
「嫌いですが？」
俺は、即答で答えると、舞先輩は驚いていた。
「え？そ、即答・・・？」
「さっきだって、屋台のおばちゃんに私の事を妻にしたいって言ったんですよ？私、このままじゃ先輩に結婚してくれって言われる可能性大です・・・、あの、先輩、孝之先輩の事好きですよね？」
「う、うん・・・好き」
「だったら、もっと行動してください、なんなら私が手助けしましょうか？」
「い、いいよ・・・自分で何とかやってみるし」
「そうですか？じゃあ、私は途中で一旦消えますから、あとは、二人で頑張って下さい、今日はせっかくのお祭りですし、告白してキスとかすればいいと思います、その現場を私が見たら、二人ともお幸せに！って言いますので」
「ええ！？ちょっと、恥ずかしいなあ・・・それ・・・」
「そうでもしないと、本当に私・・・先輩の物にされちゃうんです、お願いします、舞先輩！」
舞先輩は、う～んと言いながら考えた後、こう言った。
「う、うん、分かった、頑張ってみる・・・」
「決まりですね？じゃあ、よろしくお願いします」
そう言っていると、主人公が袋を持ちながら、帰ってきた。
「お待たせ、あかねちゃん、舞、あかねちゃんをいじめてないだろ～な？」
「そ、そんな訳する筈ないでしょ！」
「そうですよ、先輩、ちょっと舞先輩と女の子同士の会話をしてただけです、ね～？舞先輩」
「え？ええ、そうね、孝之、何か文句あるわけ？」
「い、いや・・・あ、はい、あかねちゃん、頼まれた焼きそばだよ」
「ありがとうございます」

そう言って、俺は、先輩から焼きそばをもらって、休憩スペースで食べる事にした。
食べ終わって、スピーカーから、花火の打ち上げを行いますと、聞こえてきた。
「花火だって、見に行こうか？あかねちゃん」
「あ、はい」
「花火か～、楽しみね～」
そう言って、三人歩きだす。歩きながら、俺は舞先輩に小声で話し出す。
「じゃあ、私は少し消えますので、舞先輩、頑張って下さい」
「う、うん・・・」
舞先輩が、そう言ったので、俺は、さっそく実行に移す事にした。
「あ、私、トイレに行ってきますので、先に行ってて下さい」
「着いてってあげようか？」
「結構です、舞先輩と先に行ってて下さい」
「ほ、ほら、孝之、あかねちゃんがそう言ってるんだから、行くわよ」
「お、おい、腕を引っ張るなよ？」
「じゃあ、行ってきます」
そう言って、俺は先輩達から離れて、本当にトイレに向かった。
女子トイレの中で、数分時間をつぶし、花火のドーンと言う音が聞こえたので
そろそろいいかな？と思い、女子トイレから出て、花火会場に向かった。
数分歩いて、花火会場に向かい、先輩達を探してみると・・・
丁度、二人がキスをしている場面だった。
他人のキスシーンを見てて、ちょっといいな・・・とか思ってしまったが
その考えをやめて、先輩達にこう言う。
「孝之先輩・・・、」

「あ、あかねちゃん！？こ、これはその、舞が勝手に！」
「いいんです、解ってますよ、孝之先輩には舞先輩がお似合いです！二人ともお幸せに！」
そう言って、泣く演技をしながら、花火会場を出る事にした。
「ま、待って！俺が好きなのは、あかねちゃんだ！」
「駄目、孝之は私と付き合うの！」
「ま、舞、離せ！てか・・・関節を決めるな！痛いだろ！」
「孝之・・・あかねちゃんに妻になって欲しいって言ったんだって？・・・私・・・私が孝之の妻になるよ、こ、子供だって産んであげるし・・・だから、結婚しましょ？孝之」
「そんな事を言うなあああ」
そう主人公が叫んでいたが、俺は無視して、家に戻る事にした。
水無月家に戻ると、文香さんがこう言ってきた。
「あら？あかね？一体どうしたの？息を切らして」
「は、走ってきたから・・・」
「なんで？孝之君は？」
「孝之先輩は、幼馴染の舞先輩と付き合う事になったの・・・」
「・・・・・そう、あかね・・・振られちゃったのね？かわいそうに・・・」
そう言って、文香さんは抱きついてきた。
抱きつかれて恥ずかしかったが、なんか気持ちよかったので、そのままでいると
意識が遠くなっていって、完全に記憶を失ったのであった・・・
そして・・・

気がつくと、俺は知っている場所にいた。
この知っている場所と言うのは、自分の部屋だったのである。
布団にテレビに本棚、水無月家のあかねの部屋にあった鏡面台が無く、あるのは勉強机だった。

「も、戻った・・・？って、声が！」
声が男だった頃の声に戻っているので、あわてて体を確認してみると股間に男のシンボルがちゃんとあったので、男に戻ったんだと嬉しくなった。
「やった～！戻った～・・・ん・・・待てよ？という事は、あの世界は一体・・・？」
俺は、まわりを確認してみると、テレビ画面にこう書かれていた。
「ＧＡＭＥＯＶＥＲ」と表示されてあり、メッセージ欄が出ていて
「コンテニューしますか？　ＹＥＳ　ＮＯ」と、表示されている。
「もしかして、ここでＹＥＳを選択したら、またあの世界に戻るのか・・・？」
俺は、そう思ったので、答えをＮＯにして、素早くテレビの電源を切った。
ゲーム機の電源も落として、中を開けてみると、そこには・・・
「ラブチュチュ」と書かれていて、表紙が水無月あかねとなっていたのである。
俺は、このソフトを戸棚の奥に封印する事にして、やらないと決めたのであった・・・

～Ｂａｄｅｎｄ～

～第二十九話～七日目～ＢＡＤＥＮＤ～（後書き）

はい、零堵です。
この物語も一応ここで完結です、この一カ月ありがとうございました。
次に書くのは、トゥルーエンドになったら・・・という方向で書きたいと思います。
お気に入り登録してくださって、本当にありがとうございます
一応これで最終話ですが、一話ぐらい続きがあります。

～第三十話～Ｈａｐｐｙｅｎｄ～（前書き）

はい、零堵です。
最後の話です。

～第三十話～Ｈａｐｐｙｅｎｄ～

お祭り会場には、俺と主人公と舞先輩と、手を繋いで歩く羽目になった。
うん・・・何なんだろ？この状況・・・
とりあえず、主人公の顔をうかがってみると、なんかニヤケていた。
まあ、こんな美少女二人と手を繋いで、歩いているのだからそう思うのも、無理がないと思われる。
ちなみに俺の服装が、黄色の浴衣姿で、舞先輩は赤い着物を着ていたりしている。
胸のサイズが俺と違うので、舞先輩が歩くたびに胸が揺れているのでまわりから見てみれば、貧乳と巨乳の美少女二人が
男と手を繋いで三人で歩いている状態になっていた。
まわりの男の視線が、物凄く睨まれている感じがするのは、気のせいか・・・？
屋台が出ているので、見回っていると
「あかねちゃん、何を食べる？」
主人公がそう聞いてきたので、俺はと言うと
「じゃあ、焼きそばが食べたいです」
「焼きそばだね？じゃあ、買ってくるよ」
「あ、私も行くわ」
「いいよ、舞とあかねちゃんは、そこで待っていて？」
そう言って、主人公は俺達から離れて、行ってしまった。
ここはチャンスか？と思い、舞先輩に話しかけてみる。
「舞先輩、ちょっと話したい事があるんです、いいですか？」
「私も話したい事があったのよ、丁度いいわね？あかねちゃん・・・」
舞先輩が話したい事？一体何なんだ？
「舞先輩が話したい事って、なんですか？」

「とっても重要な事なんだけど・・・孝之の事、好き？」
「嫌いですが？」
俺は、即答で答えると、舞先輩は驚いていた。
「え？そ、即答・・・？」
「さっきだって、屋台のおばちゃんに私の事を妻にしたいって言ったんですよ？私、このままじゃ先輩に結婚してくれって言われる可能性大です・・・、あの、先輩、孝之先輩の事好きですよね？」
「う、うん・・・好き」
「だったら、もっと行動してください、なんなら私が手助けしましょうか？」
「い、いいよ・・・自分で何とかやってみるし」
「そうですか？じゃあ、私は途中で一旦消えますから、あとは、二人で頑張って下さい、今日はせっかくのお祭りですし、告白してキスとかすればいいと思います、その現場を私が見たら、二人ともお幸せに！って言いますので」
「ええ！？ちょっと、恥ずかしいなあ・・・それ・・・」
「そうでもしないと、本当に私・・・先輩の物にされちゃうんです、お願いします、舞先輩！」
舞先輩は、う～んと言いながら考えた後、こう言った。
「う、うん、分かった、頑張ってみる・・・」
「決まりですね？じゃあ、よろしくお願いします」
そう言っていると、主人公が袋を持ちながら、帰ってきた。
「お待たせ、あかねちゃん、舞、あかねちゃんをいじめてないだろ～な？」
「そ、そんな訳する筈ないでしょ！」
「そうですよ、先輩、ちょっと舞先輩と女の子同士の会話をしてただけです、ね～？舞先輩」
「え？ええ、そうね、孝之、何か文句あるわけ？」
「い、いや・・・あ、はい、あかねちゃん、頼まれた焼きそばだよ」
「ありがとうございます」

そう言って、俺は、先輩から焼きそばをもらって、休憩スペースで食べる事にした。
食べ終わって、スピーカーから、花火の打ち上げを行いますと、聞こえてきた。
「花火だって、見に行こうか？あかねちゃん」
「あ、はい」
「花火か～、楽しみね～」
そう言って、三人歩きだす。歩きながら、俺は舞先輩に小声で話し出す。
「じゃあ、私は少し消えますので、舞先輩、頑張って下さい」
「う、うん・・・」
舞先輩が、そう言ったので、俺は、さっそく実行に移す事にした。
「あ、私、トイレに行ってきますので、先に行ってて下さい」
「着いてってあげようか？」
「結構です、舞先輩と先に行ってて下さい」
「ほ、ほら、孝之、あかねちゃんがそう言ってるんだから、行くわよ」
「お、おい、腕を引っ張るなよ？」
「じゃあ、行ってきます」
そう言って、俺は先輩達から離れて、本当にトイレに向かった。
女子トイレの中で、数分時間をつぶし、花火のドーンと言う音が聞こえたので
そろそろいいかな？と思い、女子トイレから出て、花火会場に向かった。
数分歩いて、花火会場に向かい、先輩達を探してみると・・・
全く見つからなかった。
どこに行ったんだ？と思い、辺りを見渡しても全く見つからず、花火がドーンとうちあがっている。
ま、上手くやっているだろう・・・と思って、俺は花火を見る事にした。

花火は、数十分続いて、最後の特大花火が打ちあがり、スピーカーから
「これで、今日の花火の打ち上げは、終了です、ありがとうございました」と、聞こえてきた。
花火が終わったのか、お祭りに来ていた客達が帰るためか、お祭り会場出口に向かっている。
俺も、このままいるのも何なんで、出口に向かう事にした。
お祭り会場出口にたどり着くと、そこにいたのは、顔を腫らした主人公がいた。
俺は、その姿を見て、一体何があったんだ？と思った。隣に舞先輩がいないので
もしかすると・・・振って殴られたのか？と思ってしまった。
「あ、あかねちゃん・・・」
「せ、先輩？その腫れてるのって・・・」
「うん、殴られた、舞に」
「な、なんでです？」
「そりゃあ、舞の告白を振ったからだよ」
「何で振っちゃったんですか？先輩の幼馴染で、美人だし巨乳ですよ？」
「だって、俺が好きなのは、前にも言った通り、あかねちゃんだからね」
そう笑顔で言ってきた、う、こいつ・・・かっこよくないか・・・？と、一瞬思ってしまった。
「な・・・私は嫌いです！先輩の事！」
「どの辺が？言ってくれれば、俺、直すし？そんなに俺の事、駄目？」
「う・・・わ、私は男の人が嫌いになったんです！」
「そう？顔を赤くしながら言われても、説得力無いよ？」
「え・・・？」
お店の鏡を見てみると、確かに俺の顔は赤くなっていた。

な、何でだ？どうして、赤くなる必要が！？
「だから、俺の事、そんなに嫌いじゃないよね？」
そう言って、いきなり俺に向かってキスして来た。
いきなりの事で気が動転してしまい、変な声が出てしまった。
「・・・ん、うん・・・」
なんかぼ～っとしてきて、キスしてる時間が長く感じられて
キスが終わった後、主人公が
「ほら、やっぱり、嫌なら突き放すでしょ？そんなに俺の事、嫌ってないよね？」
「・・・・い、いきなりして来たから、驚いただけで！」
「じゃあ、もう一回」
そう言って、再びキスして来た。
何で、俺は嫌と思ってないんだ・・・？キスされている間、頭がぼ～っとして来て
一分ぐらいキスをされてしまった。
「ほらね？でさ？これでも、俺の事嫌い？」
そう主人公が言ってくる。ああ、もう俺は認めるしかないんだな・・・と実感してしまった。
嫌いな相手なら、キスをされてもすぐに離すと思うので、俺はそれをしなかった。
「わ、分りましたよ・・・好きです、こう言えばいいんですよね！」
多分、この時の俺は、かなり顔を真っ赤にしていたと思う・・・
「うん、俺も大好きだよ？あかねちゃん、あかねちゃんは俺の彼女って事になったからね？」
そう笑顔で言ってきた。
こうして・・・俺に、彼氏が出来たのであった・・・
そして・・・

「ママ～、お腹すいた～」
「僕も～」
「はいはい、今、作りますよ」
俺、いや私は、結局そのまま交際を続け、初崎孝之の子供まで生んでしまった。
あれから随分と時がたってしまい、結局男に戻る事は無く、そのまま女として
私は子供まで生んでしまい、現在にいたる。
今でも、笹村理恵子とは親友同士で、よく遊びにいったりしている。
子供達の相手をしながら、考える。
私の人生って、これでよかったんだろ～か？と・・・
まあ、子供達は可愛いし、旦那の孝之も結構イケメンな感じのままなので
これはこれで別にいいのかな・・・とも、思ってしまったのであった。
「ただいま」
「お帰りなさい、あなた」
「パパ～、お帰り～」
「パパ、ママが、今から料理作るんだよ？」
「そうか、なら楽しみだ」
「少々、お待ち下さいね？」
うん、この人生もまあ、悪くはないな・・・と、思ってしまったのであった・・・

～end～

～第三十話～Ｈａｐｐｙｅｎｄ～（後書き）

はい、零堵です。
やっと完結です。
長かったというか、なんというか・・・書いていて思った事
なんかハズイwラブシーンとか書ける人すごいっすね～
この物語は、これで完結です。
続きというか、番外編みたいな感じの
気が付けば、攻略されそうです・・・西村舞編を、よろしくです～
では～、零堵でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8720y/

気が付いたら、攻略されそうです・・・

2011年12月27日23時39分発行